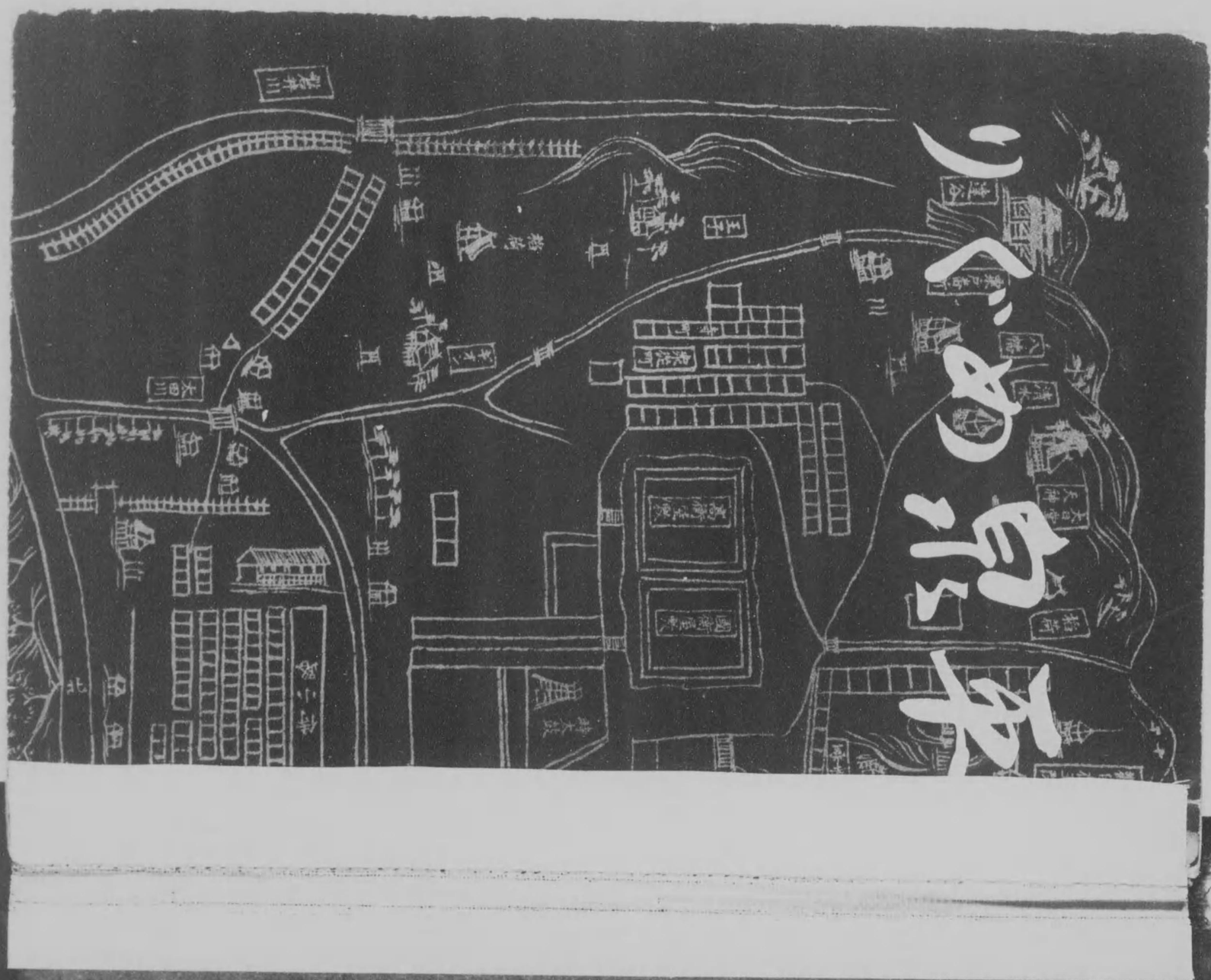
393
236

二ノ女繁昌

18m 50 6


いべの海

393-236

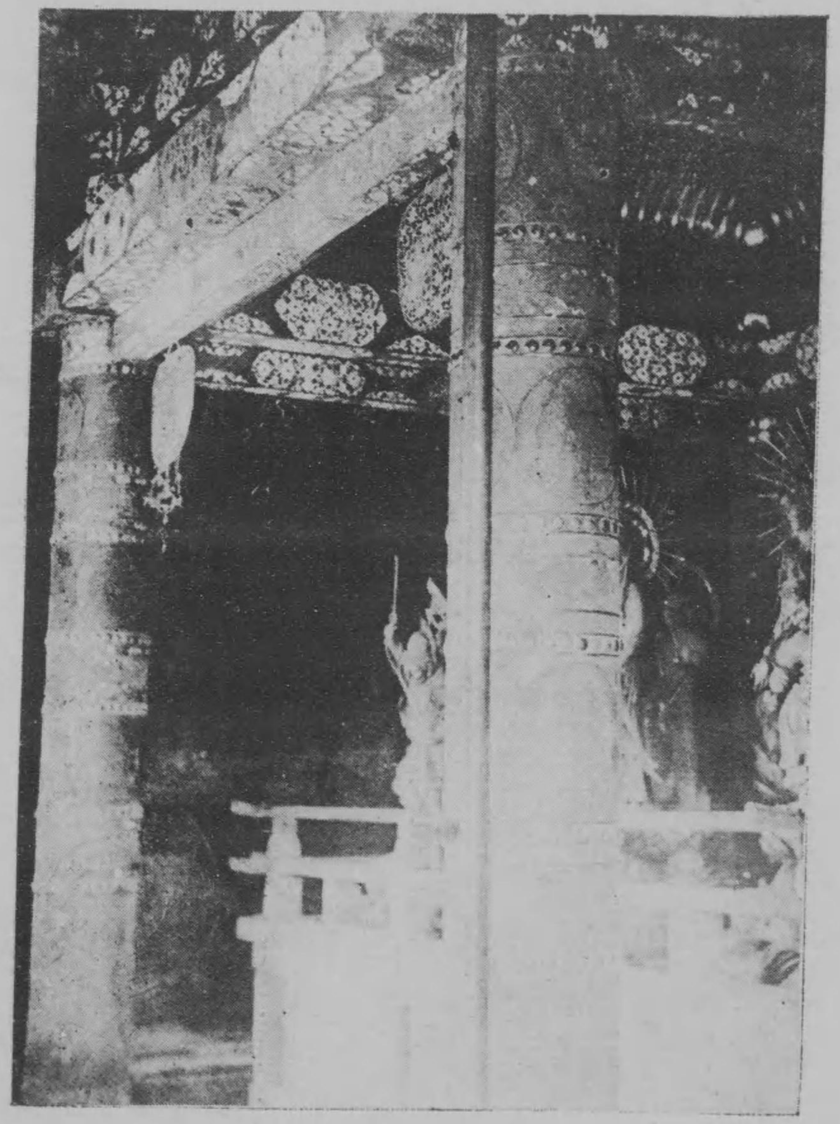
平泉めぐり

千葉青花
矢野北虹 共編

將文堂書店刊

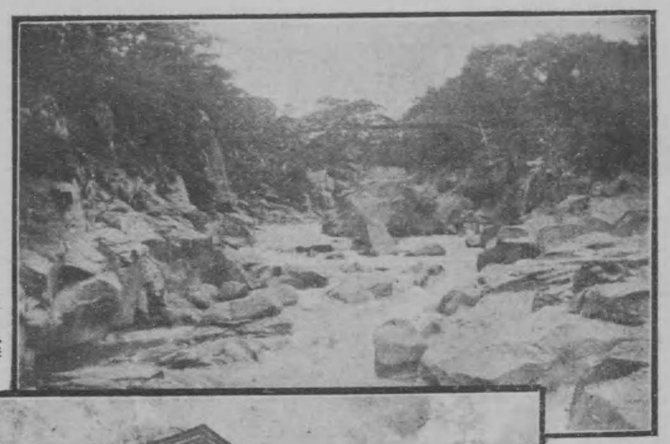
大正
10 9.17
交内

平泉の地にお遊びの後
お土産には是非お持歸りに當張らず、其上お格好な……
平泉名物 名物夢の跡
嚴美名物 瀧の雫
を、お買求め下さいませ。みんな、『平泉めぐり』の誌上に現はれてゐる、名所や、舊蹟に因んだ品々でございます。『名所に見處がなく、名物に食處(くひどころ)のない』といふ俗諺を、私共の店はすつかり打破つて了ひました。そればかりぢやなく、以上の品々は何れも、東宮殿下を始め奉り各宮殿下が平泉に行啓の砌り御嘉納の光榮を賜つたものでございます。
製造本舗 一關大町(郵便局向) 關屋光月 電話百五十六番
取次大販賣 一關驛前 千葉喜商店
平泉驛前 鈴木商店



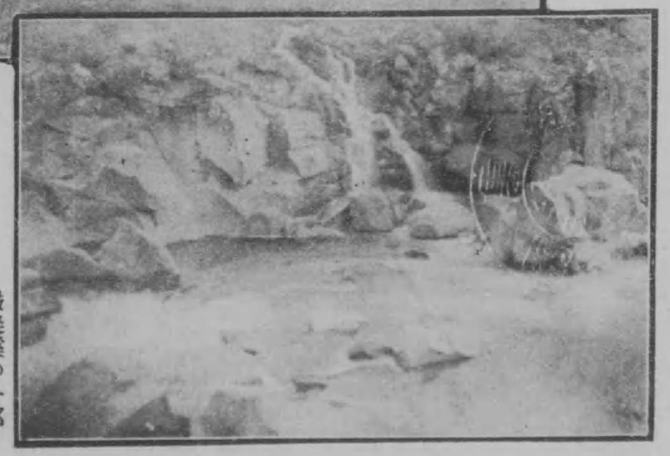
金色堂内部

表紙圖案……藤原氏全盛時代の古圖



嚴美溪

達谷窟



嚴美溪の一部

平泉めぐり

目次

序文……生田蝶介
編者より……編者
概説……千葉青花 1
平泉藝術史大要……矢野北虹 38
□平泉……8
□關山中尊寺……14
□醫王山毛越寺……29
□衣川の史蹟……44
□達谷窟……51
□嚴美溪……55
□須川溫泉……64

序文

私達はその日、嚴美溪の方から平泉をさして青葉の下道を歩いてゐた。まだ夏の初めとも春の終りともつかないうす曇つた空を氣にしながら歩いてゐると、蒲公英の白い穗が小人國のものゝやうに正確な傘形をして幾つも幾つも頰をかすめて前後に浮游してゐた。

踏みしだくみちのくの道の邊の草には、はじめて見る、名の知らない花が紫に黃に紅に白に限りなく咲いて、それがみんな露をふくんでゐて、もすそはしつとりした。

太田川を越えると目路のまともに一つの丘が現はれる。青葉の梢をすかして見ると、こちらに面した方は切つ立になつた岩石の肌を現はして、その岩面の上部に夢のやうに佛の慈顏が浮んでゐて、近づくにつれて高く仰がれるやうになつてゐる。幼稚で素朴な刻刀のあとは、源義家の矢尻で刻んだと云はない方が味があると思ふ。この岩面大佛に並んで大がかりの窟がある。今はその大きな窟の入口に櫓を組み上げその上に毘沙門堂が建立してあるが、その昔この奥底の知れない大洞窟に惡路王と稱する大王が棲んでゐたといふのである。

私はこの窟を見てその大王の名を聞いた時、何といふみちのくの山深い地にふさはしい物語だらうと思つてうれしくなつた。

『惡路王、惡路王、』さう云つただけで、その大王の風貌がはつきり描かれて來る。まして程近い流れに沿つてかつら石、姫待の瀧があるに於いては劇的の興味が油然として起るのを禁じ得ない。

かつら石の大きな石の裂け目にくひ込んで大蛇のわだかまるやうに根を張つて一本の松が半空にそびえ立つてゐる、その松の頂上からかけて岩の根まで、さながらに日光の華嚴の瀧を見るやうに大藤の花が群がつて紫の大瀧を見せて美しさはいふばかりない。

姫待の瀧の兩側にも巨木の群生があつて、その一方には卯の花が雪のやうに匂つて、その一方にはやはり藤の花が木の梢から瀧壺ふかくつゞいてゐる。

この藤の花の紫の瀧はこの平泉を中心としてそこにもこゝにもあつた、燃ゆる青葉の中に到るところに藤の紫が匂つた。

このみちのくの晩春初夏の青葉を彩るものに藤に花と桐の花とが特に目につく、桐の木の群生、ひいてその花の密集して咲いた美しさ、これは勅使屋敷跡にもあつた、判官館によぢのぼる道のそばにもあつた。

かうした自然の中を藤原三代の榮華の夢のあとたるさびしい中にどこかさびの沈んでゐる平泉の舊蹟を歩き廻つた。中でも忘れられないのは辨天堂のまんだらと中尊寺の本堂運慶の作である一丈六尺の阿彌陀如來の前でトランプをしたことだ、この山上で、この佛前でトランプをしたのは恐らく我々をもつて嚆矢とするであらう。

千數百年も經つたであらう杉の木樹の中なる瑠璃光院のさびしさも忘れられない。

いもま郭公の聲がきこえるやうだ。

郭公の聲にさびしきみちのくの瑠璃光院のひるの灯

都よりはるかにみちのくをしのびて

大正十年の夏しるす

生田蝶介

編者より

一、内容を御覧になれば本書の特徴はおわかりになることと存じますから、くどい効能書は一切省きます。

たゞ私たちは従前の乾燥無味な、嘘の多分にまじつた案内書にあきたらない方々に、敢へて一本をすゝめたく存じます。

そして、歴史的考證のうちに詩の匂ひを織りこまうとつとめた點だけでも買つていたゞければ幸福に思ひます。

なほ序文をおくられた生田蝶介先生にあつくお禮を申しあげます。

一、參考書目は左の通りです。

相原友直氏著、平泉舊蹟志。高平眞藤氏著、平泉志。志羅山頼順氏著、平泉名勝誌。寺崎清賢氏著、奥州高館沿革史。其他數種。

大正十年七月

概　説

太古の奥州は果して何ういふ形のものであつたかは知らぬが、とに角たゝには紀元前から人間の棲息してゐたことだけは確かな事實である。そればかりぢやなくその棲息してゐた人間共はお互に覇を爭ふて、みさかへもつかぬ程、茫漠とした草野をば、己れのものにしやうとして、掠奪をし合つたものと見える。それがやがては、自分達の棲む奥羽のみには慊らずして、他國をも侵略しやうといふ風な、暴慢振りを發揮したものと見える。

歴史によつて見ると、景行天皇の四十年に、日本武尊をして東夷を征討せしめられたといふ事實が明らかであるからして、一時は雜草のやうに譯もなく蔓つた所謂東夷なるものも、息をひそめて了つたものであらう。

ところが、再び東夷の蔓りはめざましいものとなり、齊明天皇の大化四年、越（北陸道三越地方）の國守安倍比羅夫が再びそれを征服したのである。そこでまづさしもに騒がしかつた奥羽の地も全く平定したかの觀があつた。しかし、それから暫く經つて、卽ち桓武天皇の御宇延暦十二年に坂上田村麿をしてあまねく東夷を征せしめたといふ事蹟などから考へて見ると、鎭靜したものゝやうに上邊は見せかけて、東夷の各々は何れ程に反逆の刄を研いでゐたものか知れない。そんな風だつたから、統

政の完全にゆかなかつたことなどは推知すべしである。

この延暦の東征に就いては、可なりこの平泉一體の原野にその戰跡を止めてゐるところがあるのである。即ち賊徒の巨魁である惡路王の棲家であつたといふ達谷窟の如き、衣川の水源地近くにある霧山、善城などは、皆それである。それから田村麿將軍が陣容をば整へたところと傳へられてゐる營ケ岡などゝいふものもある。

さてこの坂上田村麿の東征以後に至つて漸く具體的に、奥羽の政權を掌握したものゝ、政綱とか事蹟とかいふものを私は述べて見やうと思ふのである。

藤原氏は勿論、その政權を掌握したものゝ中でも著しく色彩の濃やかなものではあるのだが、それよりは、少しく溯つて奥羽の文明の本源は衣川にその首府をばかたちづくつた安倍氏一族の偉業にあるのである。が、しかし、東奥の文化の源をなしたものが、また言葉を代へていへば、それに先鞭をつけたものが、安倍氏であるとはいひ得ても、その文化をこれ程までに目覺しくした偉大なる智能と努力とは、むしろ藤原氏の偉功であると稱すべきであらう。そればかりぢやなく安倍氏はその政綱に於て非常に著しい缺陷と、不徹底さとを常にその表面に現してゐたが、藤原氏は、それとは引かへて殆んど完全に近いといへば、いひ得る程の政綱を布いて決して國内を擾亂せしめるやうのことはなかつたのである。斯うした良政治家として、その功績を後世の人に仰がるゝ藤原氏の政綱のその裏面には、果して何れ程に佛教思想の偉大なる力がひそんでゐたことかを、吾人等は先づ思ふべきである。

だから、實際の意味からして、彼を良政治家たらしめたものは、宗教の持つ力であるといひ切ることが出來る。

さて藤原氏の事蹟を述ぶるに先立つて、安倍氏の方から取かゝるべきが順當であることを、私はかんじるから、先づそれを記すことゝしやう。

安倍氏が、著く目につくやうに、頭を擡げ出したのは、頼時の祖父忠頼の時に至てからである。だが本當の意味の政治家としては、むしろ頼時をしてその始祖となすべきであらう。何故なら、彼の祖父は官名を身に擔はず、彼の父の忠良もまた陸奥大椽といふ官名は享けてはゐるが、ちつとも政治家としての手腕を振ふた跡が見えてゐず所詮は、官名を擔はなかつたも同樣なのであるといひ切ることが出來るからである。それのみならず平泉文化の上に甚大なる誘引をばなした安倍氏の事業は、實に頼時の手によつてなつたものなのである。頼時の官位は矢張り父の忠良と同じやうに陸奥大椽（現今でいふ縣知事の如きもの）ではあつたが、彼の持つ不完全な、しかも著しく偏狹に傾いた思想は、何のやうにしても、その政治を圓滑に司ることが出來なかつた。彼の思想を極端に評せば、あるひは非政治家にして純然たる武人であり、しかも何等政略をその腦裡に置かない、わからずやであつたともいへるのである。何故なら、彼には自分をば極端に異端視する冷い偏狹な思想が其存在を濃厚に

し。明らかにしてゐたからである。彼はずーツと往古の蝦夷根性を再びその胸に蘇らして、幾度己れを時の朝廷の敵として、數限りもない程、戰を挑んだことか知れぬ。彼は繼子の持ついぢけたさもしい惡意地を、遺憾なく發揮して始終朝廷に對して、刃を利いてばかりゐたのである。彼は、そして己れの居を、衣川の地に構へて、思ふがまゝの威を揮ふたのであつた。古圖によつて見ると、其全盛を極めた頃の衣川一體の地は、宛然京都の如き俤を有してゐたものであるらしい。

彼には、かの貞任や、宗任をはじめとして、八男三女があつたといふから、其勢力の何れ程、すさまじいものであつたかは、決して想像に難くはない。彼はそしてそれらの子女に、一々居を與へて益々己れの領地の防備を固くしたのであつた。ところが、天喜四年に彼は武運拙く源頼義のために、滅されて、折角に夢みてゐた企圖も遂に空しいものとなつて了つた。が、しかし、そのあとに遺された子女等はすべて有る限りの力を盡して、再び己れ達一族の勢力を回復しやうと努むるに、をさをさ怠りないといふ有樣であつた。さうした上に、彼等は頼時の意圖を嗣いで朝廷に反逆を企てたが、しかし、彼等の他を侵略しやうとして、揮ふた刃は遂には己れを滅ぼしつくす基をばつくつた。彼等はとに角はるばると都から下向して來た源頼義の軍を待迎へて、よく防ぎよく闘ふたが、遂に康平五年全く一族の根を絶されて了つた。ところで、この次を享繼いで奥羽の政權を掌握したものは、誰であるかといふに、それはこの康平の役（後三年の役）に、源頼義に助勢して殊勳を樹てた、出羽の

住人清原眞人武則である。斯うなつてみると、しぜん、國府も出羽に移つた形になり、衣川の都邑は見るかげもなく寂れ果てゝ了つたのである。

こゝでつまり平泉の文明は一時中絶に歸したものと見ていゝ。何故なら、藤原氏が政權を掌握して、平泉の地に覇を唱へるやうになつたのは、清原氏の滅亡後、凡そ三十年も經つた後のことであるからである。

さて、私はこゝに藤原氏と清原氏、また清原氏と安倍氏との關係に就いて述べて見たいと思ふのである。

安倍氏が權勢を振ふた頃に、彼安倍氏と派を同じうしたのは、藤原氏十七代の苗裔である亙理權太夫經清であつた。そして、彼は安倍頼時の女を妻とした。だから貞任や宗任などゝは、義兄弟の間柄である。

前九年、後三年の兩役に、彼は安倍氏の片腕となつて官軍をば惱ましたが、つひに捕へられて斬首されて了つた。彼はその時幾歳だつたかは知らぬが、彼は唯一人の子を生んだだけであつた。恐らくこの唯一人の子といふものがなかつたまゝに、彼が滅びたものならば、藤原氏の系統も斷絶したらうし、平泉の文化史上を飾る偉業も成らなかつたであらう。その經清の遺子こそ、後に平泉の始祖となつた清衡であつたからである。

經清を失ふた頼時の女は、間もなくして、出羽の國司清原眞人武則に嫁いた。無論經清の遺子である清衡を伴ふてゞある。

清衡が、父と呼ばなければならなくなつた武則には、既に先室との間に生れた、三男があつた。それは荒川太郎武貞、班目次郎武忠、貝澤三郎武道等である。彼はそして異父の姓をば名乘つて、權太郎清衡と呼びなされてゐたのであつたが、やゝして清原氏一族が父なる武則の沒後お互ひに覇を爭ふやうになつて、遂には自滅の形となつて了つたので、彼は、そのまゝに奥羽の政權を把握するやうになつたのである。彼は、そして首府をいまの平泉の地に遷し、文化のあらゆる方面にむかつて、出來得るだけの力を盡した。さうして殊に彼が事業の本目となしたのは、寺社佛閣の建立であつた。それは彼が宗教方面に心の眼醒めをかんじつゝあつた、その證左だといつていゝ。彼が、最も力瘤を入れて、その增營に努めたのは、慈覺大師の開基にかゝる中尊寺一山の堂塔であつた。それら數多の堂塔に由來する所は、枚擧に遑のない程である。

飜つて、彼等一族の生活の如何に華やかで、且つめざましいものであつたかは、到底吾人の想像などには及ぶべくもなかつたところであらうと思はれる。

彼等一族の居館は勿論のこと、その當時の數多の侍小路、また一山の堂宇伽藍の、その殆んど全部は、燒失して了つて、いまは僅かに、その二三が遺存してゐるのみである。

それでも、しかし、平泉は、その空しい跡をたづねるだけでも、充分に強い感懷を、心にうけることが出來る、日光と並び稱されるだけに、その靜寂さ、莊嚴さは、決して他には得られないところであると思ふ。だから、平泉の遺跡を華やかなものに想像したり、美くしいものに思ひみたりしたならば、それは大間違ひである。平泉の遺跡は、むしろ、古臭く、寂しく、だが奥床しい、心に感ぜらるるある美はしさの泛ふてゐるところである。石ツころ一つが轉がつて、その邊りに草が茂つてゐるところが、すべて昔をばしのばしむる遺跡なので、實際、眼に麗はしいものをと求めるものならば、平泉よりもむしろ日光であらう。ところが、平泉は、歷史に、また美術に、二つながらの見地からして見るも、何れだけ日光などよりは、尊く、深く、廣く、且つ雅やかであるか知れない。再びこゝに繰返すまでもなく、日光は、歷史的にも大した興味は持ち得ず、また美術的にみても、自分達の持つ原始的な純然とした氣持にぴたりと來るものは少ないと思ふからである。何故なれば、彼は、あまりにすべてに於て華やかであり過ぎるからである。私は勿論、さうした方面の專門家ではないのだから、あまり大きな口も利けぬやうな譯ではあるのだけれど、しかし、私は、他人からお國自慢たといはれたところで、決して心にうしろめたさを感ずるものではない。何故なれば私は、それだけ、平泉はある意味に於て見どころのある名所であるといふ信念を心に持し得るからである。（青花）

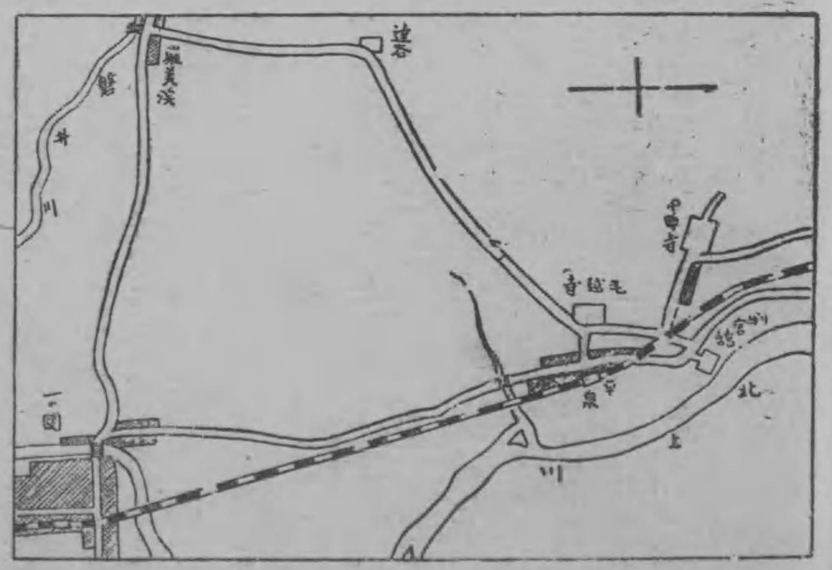
平泉

さて、これから、はじめて平泉に杖を曳かるゝ人達のために、その數多の遺跡をば探らるゝに、無駄のない道順を記さう。東北本線（岩手縣西磐井郡）の主要驛である一關驛から、北に四哩餘を距つたところに最近新築したばかりの小さな停車場がある。こゝが、舊趾として、また東北の絶勝地としてきこゆる平泉なのである。

【柳御所跡】　先づ、平泉の停車場に下車されたならば、俥を雇ふなり、徒歩なりで、中尊寺山内への道順を進まるゝがいゝ。道は北に折れてゐてその道傍には幾軒かの商店が建並んでゐる。踏切を越えると直ぐそこに郵便局がある。そこを少しゆき過ぎると、道の右手に畑地になつてゐるところがある、そこの畑中の道はものゝ一丁ともなくして、北上川の邊りに達することが出來る。その北上川の邊へとゆく道の恰度半ばのところに、『柳御所跡』と記された木標が建てられてある。こゝが即ち、藤原朝臣、清衡、基衡が、其居をば構へてゐたところださうであるが、今は農家が四五軒散在してゐるのみで、少しもそれらしい形も殘つてはゐないが、矢張りほのらかな昔懷かしい氣分の味はれるところである。

【猫間ケ淵跡】　柳御所跡を探ねられたならば、それから、矢張りこれも空しい舊趾なのたけれど、

猫間ケ淵の跡を道の傍に見て過ぎらるゝことも、決して興のないことではないと思ふ。だが、これも要するにほのかな氣分だけで、決して見どころのあるといふ譯のものではない。いまはその跡が、夢のやうに消えて了つて田になつてゐるのであるから。でも、こゝには一寸したロマンチックな傳說がある。それは平泉の全盛を極めてゐた頃の話であるが、扇の前と呼ぶ女が、こゝの深淵に身をば投じて、空しくそのうら若い玉の緒をば絶つたといふのである。ところが、それから間もなく、その深淵から怪しげなる大蛇が現はれ出て、往來の者達をば打惱ましたものであるといふ。やがて、その深淵が、ある年の旱天に底まで乾き上つた時、そこには、その大蛇の死骸が小さくなつて化石してゐたといふ話である。その化石した蛇



體は、『蛇形石』とか呼んで、たしか、毛越寺境内、千手院に保管されてゐる筈である。私はそれを見たことがある。

【伽羅御所趾】 位置は、中尊寺山内へとゆく途からでは、一寸見得ないところ。だがしかし、これも要するに其遺跡が田となつてゐるに過ぎない。秀衡泰衡が居館を、こゝに築いてゐたといふ跡で、その恰度中程には清麗な泉が湧いてゐた。即ち平泉の名はこれに因るものであるといふ。だが、これもいまは跡方もなくなつてゐる。

【判官館】 かの頼朝が怒に觸れ、主從をばひきつれて都をはるばる逃れて來た判官義經のために、秀衡が、其居館をつくつたといふ其遺跡である。位置は猫間ケ淵の北方、いまは北上川に迫つて數十丈の絶壁をなしてゐるところ。國道から直ぐ外れてのぼれるやうになつてゐる、その館跡には、天和三年に伊達綱村卿が建立したといふ、義經堂がある。そこには義經の木像が安置してある。この義經堂のほとりは、樹木が茂り、草が深い。だが、こゝからの眺望は、おほらかで、はろばろしい。眞下に北上川のしがらみにせかるゝ瀬鳴りをきゝ乍ら、視線をその及ぶ限りに放ちやれば、往昔、秀衡がかの吉野になぞらへて造つたといふ櫻山（櫻樹千本を殖え並めたといふ）――いまは束稻山と呼んでゐる――の山脈一體が見渡される。

かの西行法師が歌に、

きゝもせず束稻山の櫻花吉野の外にかゝるべしとは

といふのがある。何れだけ美くしいものであつたかは、この歌によつても偲ぶに充分である。それから、歌舞伎で有名になつてゐる『狐忠信』の、父なる佐藤庄司基治の宅址もまた、この束稻山の山腹にある。いまはそこら一體の村落をば長島村字長部と呼んでゐる。夏六月になると、そこら一面が冴々しい麻のみどりに埋れて了ふ。春はまた菜の花の黄が、眼を醒ますやうにかゞやかしい。辨慶邸址、諸士小路趾は、いまの北上川の東西兩岸の砂地、または畑地になつてゐる。それもこゝからは、ある一部分が眺め得られるが、空しいものである。それから、衣川の北上川へと注ぎ入るあたりも、はるかにながめられるが、しかし、俗説に、かの武藏坊が立往生を遂げたといひ傳へられてゐるのは、こゝから見える邊りではないらしい。それから、國道に並行した鐵道線路のながくかすかな光りも、陽の射しわたる時には、かんじられる。北上の水面にさびしい影をゆらめかし乍ら、往來する渡舟などを凝として見てゐると、自から心の澄むのを覺えずにはゐられない。明治天皇御行在所の御舊蹟である。それから、この判官館を降りて、またもとの國道をすゝむと、間もなく踏切がある。こゝらの道の兩側には、松の老樹が立並んでゐて、その影をみちの上に斑に這はしてゐる。松並木の根方には小笹や、茨がしげつてゐて、晩春のあたりから夏にかけては、風が涼しい。

【金鶏山】 國道を距てゝ高館の南に、あまり高くもない山の、こんもりとして綠に埋れてゐるのを、

旅ゆく人は見るであらう。それが金鶏山である。金鶏山の名は、藤原秀衡が、平泉城の鎭護をば神に祈り、黄金の鶏の雌雄をばつくつて、それを、山の頂きに埋めたところから生れたのだといふ。或はまた黄金と漆萬盃とを埋めてあるものだともいはれてゐる。

いまだに、其時の歌であるとかいつて、傳はつてゐる。それは、

朝日さし夕日輝く木の下に漆萬盃こがねおく〳〵。

といふのである。

山の名の因みは偖て措き、とも角、この金鶏山といふのは、其當時の庭園の中程につくられてゐた築山であつたものらしい。だから、今になつてみれば、決して見所のあるものぢやない。夏は樹々が枝を茂らし、草が深いので、一寸登るにも億劫さをかんじる。この金鶏山のほとりには、瓜割清水とか、花立山とか、金峯山とかいふのがある。

【櫻川】中尊寺の山麓を流れてゐる小川である。が、しかし、道順としては一寸横に外れてゐる位置なので、態々見にゆく程のところでもない。往昔の櫻川といふのは、いまの北上川の東岸を、はるかに離れたあたりを流れてゐたものであるとのことで、束稻山の麓の邊をめぐつてゐた故に、その名があつたといふのである。即ち櫻山（いまの束稻山）の麓を流れてゐて、爛漫たる花の彩が影さしたところからであるといふ。いまの櫻川はゆかりも何もないものである。たゞ櫻の木が多くその岸邊に

生へてゐる位のものである。そこを見殘して、やがて道をすゝむと、もう、關山中尊寺の山門に近い。その右手の一寸した駄菓子屋の裏庭になつてゐるところに、辨慶の松といふのがある。墓標として植へたものだといふが、眞實か、ウソか解らない。とに角この松の根方に、碑がある。素鳥の句、『色かへぬ松のあるじや武藏坊』といふのである。斯うした句の味を味はつただけでも一寸得られない氣持である。この辨慶松のほとりには、鈴木三郎重家の墓であるといふ鈴木松。龜井六郎重清の墓であるといふ龜井松。增尾十郎兼房の墓であるといふ兼房松などがあるが、もとより見どころのないものである。（青花）

關山中尊寺

中尊寺に登る表坂の左手に、一寸した一本の櫻がある、これは武藏坊の手植にかゝる薄墨櫻である。が、もとより、幾度植え繼いたものであるか知れない。やがて道は坂路にかゝるのである。この表坂を稱して、月見坂といふ。往昔觀月の宴を張つた趾であるといふ。坂を登つて間もなく、

【辨慶堂】がある。別に愛宕堂の名がある。本尊は一尺八寸の將軍地藏及び八天狗で、これは元弘二年鎌倉から佐貫三郎平景房をして奉納さしたものであるといふ。其傍に辨慶の立像がある、高さ六尺二寸である。まつ黑に煤けかゝつてゐるけれど、ところどころにまばゆい金色の光がある。實物として登錄狀を有するものは、中尊寺、毛越寺一山祭禮圖（紙本著色）笠、（木製鎌倉彫）茲鉆（銅鍍金、辨慶の所持品であるといふ）この他に鑑査狀を有するものに、磬（銅）がある。運慶作の大日如來、鬼子母神、不動尊などは美術方面から見て最もすぐれたものである。また推古朝の作にかゝる三尊彌陀如來三體、多門天、六字鍔、樂面、琵琶、笛、鑓、古刀、曲玉、その他、種々のものが保存されてある。別當の地藏院は堂の西方にある。堂のほとりは杉の茂みが、鬱蒼たる影をつくつてゐる。やがて、こゝを觀終へたならば、眺望の極めていゝ東物見に暫く佇んで、見はるかす限りを眺めらるゝがいゝ。こゝは故小松宮殿下が御休憩になられたところださうである。（青花）

【關山中尊寺】仁明天皇の御代嘉祥三年慈覺大師の開基にかゝる。大師はもと比叡山延暦寺に居られたが、後東北巡錫のみぎり此地を卜して一寺を起した。當時は弘臺壽院と稱し天台宗の一院として大師自ら多くの佛像を彫み法經を手寫して安置された。

貞觀元年、清和天皇の敕によつて寺號を中尊寺と賜はつた。其後堀川帝の敕を奉じて、藤原清衡が堂宇を經營することになる。長治二年に工を始めて鳥羽天皇の天治三年に竣成した。堂塔四十餘、僧坊三百餘宇、まことに山河の形勝と輪奐の美とを極めたもので、堀川鳥羽兩帝の敕願所と定められてゐた。

まことに中尊寺一山の隆盛は、平泉館繁榮の時代にある。清衡、基衡、秀衡、三代に亙つて皆深く佛法に歸依し、各々力と金を惜しまず建立した堂塔伽藍の數は、まことに夥しいものであつた。藤原時代美術工藝の粹を凝らした是等の佛閣が、四代目泰衡の敗滅によつて次第に衰滅に傾いたと云ふことは、かへすがへすも殘念なことである。その後、建武四年、野火のために一山ことごとく燒かれ、さしも宇内の靈場として光彩陸續たりし大伽藍もことごとく焦土と化して了つた。其時辛うじて燒滅をまぬがれたのが、金色堂と經堂で、當時の中尊寺なるものは今殆ど其面影をすら止めてゐない。自然の推移は、さして眼にも立たないけれど、人爲のはかなさと一切の假現の愚かさ丈は、極端に眼につく。一山をつゝんだ老杉とてもその多くは仙臺藩以後のものらしい。

毛越寺が、中尊に比較して、より濃かな哀愁をそゝり一層切實な頽廢の美を示してくれるのは此中尊のやうに、時代を逐ふて修造された跡がないからである。自然の脅威を、あまりに露はに漂はしてゐるからである。しかし乍らこれが又中尊寺が毛越寺よりも觀客の足を繁くし、現在に於ての藝術的價値や史的例證の確實さを保證する一大根據となるのではなからうか。

「伊達政宗・仙臺に受封の後、若干の寺領を寄附し、絶えたるをつぎ廢れたのを興し、佛像寶物を保護しかくて現狀を維持して來た。

明治九年に明治天皇、同じく四十一年には今上の臨幸あり。保存資の御下賜などがあつて後政府の諸種の保護を經て現狀に達したのである。——

辨慶堂から中尊寺の本坊へゆく道は老杉が鬱蒼と茂つて、冷い苔の香が水のやうに肌に迫るのを覺える。夏は木の間から郭公やほととぎすの鳴くのが聞え、幽寂な境を、左に瑠璃光院・藥師堂・右手に地藏堂などを見ながらゆけば、やがて本坊に達する。

【本坊】は建武四年の野火に燒けたのを明治四十二年に再建したもので、かなりに宏壯なものではあるが、みるべき何物もない。本尊は運慶作の阿彌陀如來丈六金容の座像である。

そこで小憩したのち傍の僧坊に行つて案内を乞へば、僧侶が順次に一山説明の勞をとるだらう。本院を出てやゝ西方に行けば右手に、

【峰藥師堂】がある。本尊は、一丈六尺の藥師如來で運慶の作にかゝる。その他清衡の持佛である と云ふ彌陀觀音、勢至、檀金の三像も併せ藏めてある。天正の頃其三尊を紛失したところ、後代に至つて土地の長藏とか云ふ男が、わらびを掘ると、偶然にも當時の藥師堂趾から發見したのだと云ふ。口碑によれば右長藏なるものは、發見の時から三月ばかり前のある日、その事を夢にみたとか云ふことである。

堂内裏手に所狹きまでに寶物が並んでゐる。宗庭筆の毘沙門天、十六羅漢、辨財天、宋の岳飛の書、惠心僧都の彌陀如來、道眞の眞筆などは、その重なるものであらう。

【大日堂】といふのがある。本尊は、慈覺大師の作にかゝる金剛界大日如來である。

堂を出て、やゝ西すればその並びに、

【鐘樓】が立つてゐる。當時の鐘樓は天仁元年の建立にかゝると云ふが、建武四年の野火に同じくゆるやかな傾斜をやゝ歩めば、路傍右手の小高い所に、

燒かれた爲めに、金色院の住僧賴榮師が再び鑄造したのだと云ふ。即はち足利將軍の時代である。寂びれた廢墟の匂ひに浸らうと思ふならば、幽かに、錆びた鐘を一つきついてみたまへ。幽寂な餘韻は一山の杉林にこもつて、一入の哀愁をそゝるだらう。更に心ある人は此鐘の銘を讀まなければならない。

關山曉鐘覺二無明眠一　驚嶺晚嵐拂二煩惱塵一
摧二伏魔魅一感二降靈仙一　悉極二六道一下達二九泉一
劍輪輟レ若鯨音無レ邊　普配二聖賢一四化二父母一
利物心堅鑄施二金錢一　銘加二鏤字一永不朽傳

康永二年大歲癸未七月

鑄師　散位藤原助信
願主　權律師　賴榮
大旦那　左近將監平親家
大旦那　當國大將沙彌義慶

さて、阿彌陀堂を右に見てやゝ行けば、一茶店の前で道は幾つかに岐れてゐる。先づ左手に直角を劃いて坂になつてゆく角に、嚴めしい土藏づくりの建物がみえる。

【寶物陳列所】　である。こゝに中尊寺一山各院の寶物が陳列されてある。

其中國寶に編入されたものでは、史料參考の分で金色堂所有の天蓋二面、同じく金色堂の棟札七枚、美術工藝の分で、金色堂附屬の幡頭華蔓三枚、それから有名な一字金輪佛像がある。

一字金輪佛は、甲種國寶で、普通拜觀をゆるさない。運慶の作と傳へられ、秀衡の護持佛であると

云ふ。しかし乍ら國寶說明書によれば、端嚴精妙なる刀法及厨子の天井に彫刻した天人の風姿などから考へると運慶以前、即はち藤原時代の制作とみた方が妥當であると云ふ。そして其體內を空洞にして其背を省き平肉彫にしたのは一種無比の彫法として美術界稀有の好標本であるさうだ。像は微妙を極め莊嚴極まりなく、肉色の肌をもつので、俗に人肌の御佛と云ひ傳へられてゐる。

陳列品は、すべて百に餘るので一々列記する煩はしさを避けて重なもの丈を列擧することゝする。

先づ鑑査狀を有するものに、地藏院所有の磬（銅製、建長二年）及金色堂の附屬具である。磬及磬架がある。慈覺大師の所持と傳へられてゐる銅鍍金製の五鈷　感神院所有の柄香爐も同じく鑑査狀を有する。

佛像も數ある中で、法橋定朝作の大日如來並びに釋迦如來像、慈覺大師作の延明地藏木像の三尊は登錄狀を持つてゐる。その他、運慶や慈覺大師作の佛像が夥しく並んでゐるが一々列擧はしない。

その他當時の工藝を考へるに足るものとして禮盤、佛像破片、螺鈿具、古錫杖、佛器、古刀、笈、石器、古笛などとりどりに面白い。

古書畫には更にみるべきものが多いけれど、重なるものをあげれば左の如くである。第一に智證大師筆の胎金兩界曼荼羅　宗庭の天臺大師畫像をはじめとし、平泉・骨寺・中尊等の古圖、義經東下繪卷物、中尊寺一山並びに毛越寺の祭禮圖、巨勢金岡が三十番神及十三佛、黃筌の出山釋迦、土佐家

筆の十六善神、惠心僧都の彌陀三尊、智證大師の不動尊などみな見るべきものであらう。

なほ、後水尾・後奈良兩帝の宸筆、一休和尚、傳教大師、慈覺大師の書をはじめ諸種の訴狀や下知狀なども所狹きまでに並んでゐる。心ある人は、一度の素通りでは到底滿足出來ないにちがひない。こゝでは私は下らぬ感想や紹介をやめて、たゞ見る人々の鑑賞眼に任せるのが最も適當であると思ふ。

さて、陳列所を出ると道は三方四方に分れるが、先づ右手の池中にある

【辨財天堂】を見られるがよい。

こゝに甲種國寶の曼荼羅が收めてあるのだ。由緒を調べてみると、長治二年藤原清衡が最勝王院を建立して、奉納したのが、此最勝王經寶塔の曼荼羅であると云ふわけになる。紺紙に金泥で經文の紺字を並べ、十階の塔を鮮明に畫いたもので、後秀衡が自ら筆を執つて、その塔の左右に經文の大意を畫いたと云はれてゐる。延元二年に最勝王院が燒失した。後、伊達綱村が辨財天堂を建立して此曼荼羅を安置したのである。此十愼の曼荼羅こそ、中尊寺一山の寶物の中でも最も注目に價すべき壯麗な佛教藝術の粹だと思ふ。これ丈はどうしても見のがすことの出來ないものだ。

金色堂に通ずる綏勾配の石段の上り口に古びた一宇の堂がある。

【閼伽堂】と云ふ。赤堂とも書く。昔は表坂下の北にあつたのを火事に燒けた後で、現在の所にうつしたのださうだ。本尊は、不動尊二童子及び丈六の彌陀藥師、共に運慶の作である。石段を上りき

れば、鬱蒼とした老杉の間に、名高い金色堂が寂びはてゝ立つてゐる。

【金色堂】は、中尊寺否平泉に遊ぶものゝ最も主眼とするところであらう。里俗に光堂と云ふ。その昔北上川の鮭が、遠くこの御堂の光に射られて溯ることが出來なかつたと云ふ、燦かしい金色堂の面影は今見るよしもないけれど、蒼然とした白木の覆堂は今雨に銷びてものなつかしい情感をそゝる。

芭蕉翁の有名な一句「五月雨の降り殘してや光堂」を、ひとり靜かに口ずさんでみたまへ。杉の影が、憂鬱な雲ゆきの下にあつて淋しく搖れてゐる。堂を覆ひかぶせるやうにして草は深く茂り、雨氣が靄のやうにまつはり乍ら日の昏れを待つてゐる。

暗らい雨が降つてゐるのだ。芭蕉は、かういふ日に、金色堂の前に立たのかもしれない。しつとりぬれた屋根の金箔が寂びれたまゝ雨に光つてゐる。——

雨は今にかはりなく降るけれど、光堂の光は褪せはてた。三代の榮耀はまことに一睡の夢と消え、廢墟の自然すら姿を變へた、その八百年の歷史が、なほその頽廢のかげに、ものうい嗟嘆をもらす。

天仁二年藤原清衡の建立にかゝり、三間四面の堂宇である。內外四面悉く紗羅布を以て裏み、黑漆を厚塗にした上に、あまねく金箔を貼つたものだと云ふ。

內部の柱梁には悉く螺鈿珠玉を鏤め、中壇の四隅には所謂七寶壯嚴の卷柱を立てて、十二光佛を圖

現した。

内陣に三壇をかまへ、二尺一寸の阿彌陀の座像、二尺四寸の勢至の立像、二尺四寸の觀音の立像、二尺六寸の六地藏の立像、二尺九寸の多聞天の立像、並びに二尺二寸の持國天の立像を安置して在る。すべて十一軀、法橋定朝の作にかゝると云ふ。又中央の壇には清衡、左壇には基衡右壇には秀衡、都合三代の棺を納めてある。

須彌壇は同じく螺鈿をちりばめて孔雀を畫き、頗る微妙を極めたものであるが、今漸く錆びて、一種莊重な氣分をかもし出してゐる。

建立以來百八十年ばかりの間は雨風にさらしてあつたさうで、其爲めに外部の金色は殆ど消え、現今では漸く內陣の奥のあたりに當時の金色をうかゞふことが出來るばかりである。

故に金色堂の眞面目は外部からはうかゞふわけには行かないことになる、覆堂は鎌倉將軍惟康親王の命により正應元年相模守平貞時並びに陸奥守宣時の建設にかゝる。これは、金色堂の頽廢を救ふ上に偉大なる功績を殘したものといはなければならない。その時以來代々の國守がその例を追つて修復したり、後水尾帝の勅によつて修繕されたりして金色堂を不朽に傳へるべき計畫は永い時代を經ても、決して衰へたわけではなかつた。

明治二十六年覆堂を銅茸にするときには內務省から若干の寄與あり、同じく三十年には美術學校一

派の手によつて佛像佛壇及び伽藍に至るまで大修繕を加へた。

由來、金色堂は藤原時代建築の模範として、宇治の鳳凰堂、春日神社、嚴島神社などゝ並び稱せられてゐる。明治三十年古社寺保存法によつて特別保護建築物に編入されたことは、あまねく人の知る處であらう。

堂の北側には先程示した「五月雨の降り殘してや光堂」の句を彫つた芭蕉碑があり、南側に、苔むした舍利塚なるものがある。これは圓光大師の隨從であつた阿波之助といふ信者が、この堂の緣で唱念往生した。その遺骸を荼毘に附した所、骨肉が舍利に化したので、こゝに葬つたものと傳へられてゐる。

大槻盤溪の一詩がある。

三世豪華比帝鄉　朱樓碧殿接雲長
只今唯有東山月　來照當年金色堂

なほ、陸中山目村の人相原友直氏が天明年間にあらはした「平泉舊蹟志」に光堂物語といふ面白い俗說が載つてゐる。今其大意をかいつまんでのべてみる。

元祿十二年乙卯の歲、光堂の板敷が破損したので仙臺から御作事奉行として遠藤四五右衛門をつかはし假屋を立てゝ修繕にとりかゝつた。その作業中、佛像並びに三代の棺を假屋に移しておいたが、

當時その遺骸を見た男が都合三人あつた、一人は中尊寺の僧侶で主淨院といふ名の男、一人は磐井郡小島村天臺宗滿福寺の住職で快尊と云ふ。今一人は衆徒の櫻本坊といふ男であつた。この人々の物語によれば、

清衡の棺は、中壇の下にあり、長六尺幅三尺、黑漆でかため上は惣金であると云ふ。死體は常の人と異ならず唯身長は並よりはやゝ大きい。色はやゝ白く裝束は白綾小袖の直垂をつけ一方に太刀一振、鼻紙袋を持ち、その中に色々の書物や鎭守將軍の綸旨などを收めてあつたさうだ。

基衡の棺は東北隅の佛壇の下にあり、棺の長、幅共前に同じく、朱塗で太刀や小道具をおさめてあつたと云ふ。

秀衡の棺は西北の壇下にあり黑漆でかため大いさは前の二つとひとしいと云ふ。

秀衡の棺側には、なほ泉三郎忠衡の首桶がある。一說に泰衡の首だとも云ふがはつきりしないらしい。以上三代の棺、首桶共に布をかけ堅く塗りかためてある。そして三代とも何れも白裝束に錦直垂袴で各白の印を持つてゐる。面體は何れも常の人に異ならず、たゞ小鼻が落ち身長が並よりは大きく、結跏趺坐の姿勢を取つてゐたと云ふ。

死體の實相は右のやうなものだが、物語りはこれで終つてゐるのではない。

死體を見た三人のうち櫻本坊は翌年に死に、快尊は其翌年から狂亂の姿で放鄕を出たまゝ行衛知れ

すになつたと云ふ。殘りの淨心院といふ僧は三年すぎてからこれも亦死に果てたさうである。

其後、天正年中に衆徒の僧侶數人が、彼の遺骸を見たところ或は短命で死に或は盲目となつたといふ、すべて僞りのない事實として言ひ傳へられてゐる。

因みに清衡は大治元年七月十七日六十二才を以つて卒し、基衡は保元二年三月十九日に卒した。三代秀衡は文治三年十月二十七日、九十三の高齡で卒したと云はれてゐる。

金色堂の西北に

【經藏】がある。天仁元年即ち金色堂よりは約二年ばかり前に、同じく清衡が建立したものである。

もと二階づくりのものであつたが、建武四年の野火に上層丈燒失し現今あるのは下層丈である。三間四面の堂ではあるが藤原時代建築の樣相をうかゞふに足るものだ。

本尊は、鳥羽天皇の御願により下賜になつたもので、すべて毘首羯摩の作にかゝり精妙比類なき靈佛である。

本尊はすなはち、文殊菩薩（二尺二寸）で獅子座にのせ、右は二尺四寸の優闐王の立像が轡を把り、一尺八寸九分の淨名居士が拂子を採つてその後に從つてゐる。左は善哉童子が匣を捧げて從ひ、佛陀波利が錫杖を持つて後に立つ。

猶、右側には千手觀音と二十八部衆（各々五寸五分）を安置してあるが、何れも運慶の作だと云ふ。但し、佛像は昔のまゝなのは光彩剝離して殆ど顔面も見分けのつかぬ程になつてゐるが、大部分は後世に修理したものらしく美しい金色を見せてゐる。

平泉の眼目は、金色堂と此經藏にあると云つてもさしつかへないので、共に特別保護建築物であり、國寶の秀麗さに於ても一頭地を抜いてゐる。

先づ本尊を安置した螺鈿八角須彌壇は、瑠璃や珠玉をちりばめ、螺鈿を以つて裝ひつくした壯麗なもので、まことに得難い美術品である。

螺鈿卓、螺鈿燈臺、木造禮盤と共に國寶に編入された。

兩側に八架を設けて三種一切經を奉藏する。經文をおさめた箱は、黑漆で塗り、蓋に螺鈿見で經卷の題目を鏤めたもので一切經と共に國寶である。

清衡の納めたのは紺紙に一行おきに金銀泥をもつて書いたもので、自在房蓮光が奉行となり八年の歲月を費したと云ふ。基衡の納めたのは紺紙に金泥であり、秀衡の奉納したのは黃紙宋版のものである。此三種一切經は古來有名なもので、今その一部が各所に散在してゐると云ふ噂もあるけれど確かではない。

なほ堂內には、鑑査狀を有する磬架及唐櫃並びに登錄狀を持つ露盤板、棟札などがある。

經藏を出て北に歩めば、左手に

【釋迦堂】がある。本尊釋迦、文珠、普賢は定朝の作にかゝる。

なほも北にゆけば白山社の境內となり。多寶塔跡などを木の間に認めるだらう。

【白山神社】は、嘉祥三年中尊寺と同時に慈覺大師の勸請にかゝり。加賀の白山を分祀したのだと云ふ。現在の堂祠は伊達家の再建にかゝる。明治初年に村社白山神社となり、今迄本尊としてゐた佛體（慈覺大師の十一面觀音、運慶作の觀音）を他堂に遷したのださうだ。

こゝに伊達家の寄進にかゝる能舞臺がある。政宗公が能裝束を寄進して以來、代々の仙臺藩主が其例にならつたとかで、其裝束の豐富なことは、他に多く比を見ないと云ふ。現に寶物陳列所に多數の能面や裝束の出陳を見ることが出來る。

毎年舊曆の四月初午未の兩日に祭禮がある。當日は近隣よりの觀衆が夥しく、特に中尊寺一山の各堂が開放して寶物を自由に展覽さすことになつてゐる。

初日の午前には、獅子舞、田樂舞、若女の舞などといふ古代の舞樂が行はれ、午後からは、吉例によつて「竹生島」を演ずることになつてゐる。「竹生島」は親しく明治天皇の叡覽を忝うした光榮を有するので天覽能と稱し、毎年所演の豫定になつてゐると云ふ。

白山社の裏は、草や雜木が深く茂り、昔の物見のあとを殘して、直ちに斷崖となる。

北方、陣場、張山、瀬原柵などの連亙した一帯の丘陵と、此中尊中一山との間に狹長な平野が廣けてゐる。歴史に名高い衣の里がこれで、今は概ね田畑となり杉林や農家の散在する間を衣川が細くうねってゐる。

多くの旅客には、多分此衣川の遺跡まで見きはめる時間と餘裕はないことゝ思ふ。又事實遺趾といつても何物もないのであるから、此物見から望見すれば足りる。

衣川の白く光るあとを溯つてゆくと、やがて、中央に削いだやうに赤土肌の露はな、突兀とした山鼻にぶつかるだらう。川はその裾をめぐつてゐるのだ。

そのありが、琵琶柵の趾で、泉ケ城と稱し泉三郎忠衡の古城趾だと云ふ。附近には詩歌に名だゝる衣の關趾もある、川を距てゝ小松柵衣の柵のあとを草深きあたりに想見し、眼を次第に北より東に轉ずれば、はるかに衣川の鐵橋をみるだらう。そのあたりで辨慶が立往生したと云ふ云ひ傳へは古來あまりに有名である。

平泉中尊寺一山の古蹟は、これで殆ど書き悉くしたことゝ思ふ。猶、あへて省略した多くの堂趾は、さほど重大なものでもないし、餘りに煩鎖に過ぎるために割愛したわけで、讀者も宥してほしい。

（北虹）

醫王山毛越寺

平泉停事場から一直線に保勝道路を行くと五分もかゝらないで毛越寺の境内に着くことが出來る。寂しい此廢墟は、今徒らに艸に埋もれて莊嚴の限りをつくした堂塔の面影すら見るよしもない。舞鶴池は、今は田となり、鐘樓、皷樓、五重塔、などの趾には唯昔ながらの礎石をみるばかりである。老松の根かたに芭蕉の碑をよむならば、人は云ひ樣のない寂しさと懷しさに浸り乍ら、かの有名な「夏草やつはものどもが夢の跡」の一句を繰りかへし誦しないではゐられなくなる。まことに毛越寺は寂びはてゝ見るべき何物もない。そして一味の憂愁にも似た感じが、あたりに漂ふのを禁ずるわけには行かないだらう。これは中尊寺一山の持つ或る種のいかめしさと幾十百の古寶に疲れた瞳に、やさしく迫る頽廢のかけである。依然とした自然のうちに、ほろびゆくものゝ姿を見て涙ぐむ、人々のやるせない情緒ではないか。

【毛越寺】は嘉祥三年慈覺大師の開基にかゝる。先づ山號と寺號にちなむ奇しき傳説のうちに此靈場の緣起をよめ。

慈覺大師が濟度のために定めもなく東奥を巡歴されたとき、ある日のくれぐれ、俄かに霧が山をこめた。霧は濃く道をかくして、大師の行路を遮いだ。そして次第に深くなりまさる雲霧の中で寂しく

大師が瞑目されたとき、夢のやうに白い鹿のかげがあらはれた。鹿は白い毛を散らしながら山を越えてゆく。大師はあやしみながらも白い毛のあとを傳つて行かれたが、ふと後を顧りみた。そのと音薄れゆく霧の中に白髪の老翁が現はれ、大師に告げて云つた。「此に寺院をたてよ、しからば弘法濟民の功高く揚り邦國不二の靈物ならむ。」かくて忽然と其影は鹿と共に消え失せた。大師は、その老翁こそ正しく藥師如來の示現であると深く信じて、こゝに一宇を建てた。そして嘉祥寺と號し、大師自作の醫王善逝の靈像を本尊として大伽藍を建立した。山號は藥師如來の靈現に由つて醫王を取り、寺號は白い鹿の毛のあとをつたつて山を越えられたといふ意味から毛越寺と稱したと云ふ。金號王院と號し、仁明天皇の時から歴代の北方鎭護の祈願寺であつた。その後久しい間、逆亂などのために荒廢に歸したのを堀河天皇の勅願によつて基衡親子が奉行となり十三年の長日月を經て壯麗なる七堂伽藍を落成した。元龜天正の兵燹のために惜しいかなことごとく烏有に歸し今は徒らに礎石を殘すばかりである。

現在は老松にかこまれた廣場の中央に寶物展覽所がある。

唐傳來の佛畫や巨勢金岡の不動尊畫、十三佛畫、そして惠心僧都の三尊彌陀畫像、慈覺大師並びに智證大師の不動尊畫像に交つて勅使舞面や古笛や樣々の佛佛像具がある、秀衡・基衡寄進の法華經、文殊經、最勝王經の一部分なども見のがすべからざるものであらう。

去つて、艸深き

【南大門趾】に昔をしのべ。昔のまゝなる礎の上にかそけく落ちる松かさの音を淋しみつゝ。當時は二隅總門で、廻廊を廻し、文殊菩薩金剛力士を安置し、勅額を掲げ源頼朝の壁書をおさめたと云ふ。立つて望めば、一心の二字に型つた

【大泉池】は荒れて、蘆荻の茂るに任せてある。昔は池の廣さ東西百三十間東北八十間、そして中島を築き、和漢竺三國の石を用ひて四方を飾り水底には美はしい石を列べたといふ。現今では、半ば以上埋まりつくして昔の面かげは見るよしもないけれど、所々に巨きな石や美はしい岩などを見ることが出來る。

丹塗の橋のかげに龍頭鷁首の船を浮べたと云ふそのかみには、池畔に聳え立つ金堂や南大門の陰影をうつしながら、水は微風にゆれたことだらう。

池畔を廻り幽かな小徑をつたひ午ら深い草をわけてゆけば杉木立のかげに七堂伽藍の趾がある。

【大金堂圓隆寺】は、はじめ嘉祥寺と稱したが、後、鳥羽天皇の勅により圓隆寺の號を賜はつたと云ふ。醫王山の根本中堂で、内部の莊嚴、紫檀、金銀、珠玉を以て裝ひ善つくし美をつくしたものであつたさうだ。運慶作の丈六の藥師十二神將日月二天を安置して本尊とした。佛像は彫刻の精巧なること比類なく、當時無双の靈場として遠く京師にまで其名が高かつたが、嘉祿二年火にあつて一切烏有に歸した。今は無數の礎や渠石などか殘るばかりである。その左手にあるのは即ち

【常行堂】で、昔慈覺大師が當寺草創のみぎり此堂に勤行せられた所だと云ふ。後、堀川烏羽兩皇の勅に依り清衡の再建にかゝり幾多の火災をまぬがれて此堂ばかりはひとり全盛の俤を保つやうにみえた。後、慶長二年野火に燒けて灰燼に歸したが、幸にも本堂だけは其災ひを免れた。現在の五間四面の御堂に安置されてある寶冠の彌陀四菩薩並びに魔多羅神がそれである。常行堂の左には、

【法華堂跡】がある。當時は釋迦文殊普賢千手觀音二十八部衆並びに鬼子母神十羅刹女などが安置してあつたけれど常行堂と同時に燒失した。今は鬼子母神の像と礎が漸く昔の俤をとゞめてゐるばかりである。圓隆寺跡のやゝ西方には同じく礎はかりを殘した、

【講堂跡】がある。當時の本尊は胎金兩部大日如來であつたと云ふ。更に西すれば艸むらの中に

【嘉祥寺の趾】がある。これは慈覺大師艸創の嘉祥寺が、先にのべたごとく鳥羽天皇の勅によつて圓隆寺の號を賜つた後、基衡が新規に建立したものである。基衡が業半ばにして卒したためにその子の秀衡があとをついで大成した。四壁並に三面の扉には法華二十八部の大意を考案した壯麗なる壁畫があつたと云ふけれど、ひとしく見るべき何物も殘つてゐない。繰りかへし說くまでもなく、まことに毛越寺境内は艸深く礎石稀れに堂塔の面影をとゞめてゐるものすら殆ど見あたらない、たゞ白い木標が、此處かしこに淋しく立つてゐるばかりである。旅客がもしこの寂びれた廢墟に中尊寺一山のもつやうな偉大な藝術や壯麗な伽藍などを期待するならば必らず失望せずにはゐられないだらう。こゝ

にあるのは唯一種ほのかなる法の香と死すべきものらの寂しいあきらめにも似た感慨との交錯である。そして古代藝術の潰滅に對する哀惜をひとしほ强く感ずるだらう。歷史は要するに何物も殘さずに消えてゆく。そして單なる人間歷史の事實の上からのみ究竟の何物かを得やうと努力するものは、要するに愚かである。

潰滅の趾をなほも詳しく探らうとするならば、墓標のやうに並んでゐる白い木の杭の表をよめばいゝ。

經藏跡、文珠樓跡、鐘樓跡、鼓樓跡……。そこで、踵をかへして七堂伽藍の跡をすて、鐘樓堂（元祿年中の建立）を左手に見、朽ちた門を出ると細い徑がある。それをやゝ北に歩いてゆくと田の中に荒れはてた御堂を見るだらう。それが、

【大阿彌陀堂】で、觀自在王院と號し、運慶作の阿彌陀佛を本尊とする。基衡の室の建立にかゝり當時の御堂は金銀にてよそほひ洛陽の名所を壁畫とした壯麗なものであつたらしいが元龜四年に燒失した。後、享保年中に假堂を立てゝ辛うじて燒亡をまぬがれた本尊並びに古輿を安置した。これが現在の堂宇で、毎年四月二十日には哭き祭りを行ふことになつてゐる。當日は基衡の室、（阿部宗任の女）の忌日にあたり、毛越寺一山の僧侶が集つて經を誦し、古輿を荷つて堂の周圍を廻り乍ら罪儀の狀を模するといふ。從前は哭き乍ら儀式を行つたので哭き祭りの名があるのだといふけれどそれ丈は

廢れた。當時から七百五十年の間缺かすことなく行はれてゐる珍しい祭儀である。

そのやゝ東方に、同じく基衡の室の建立にかゝり運慶の彌陀を安置したといふ【小阿彌陀堂趾】がある。大阿彌陀堂と同時に燒失したと云ふ。堂の後に【基衡室墓】が殘つてゐる。現在の石碑は後年の再建にかゝると云ふ。

二堂の前に擴がつてゐる田のあるところは【舞鶴池】の趾になつてゐるが、今は間々汀石を殘すばかりである。この池中に、昔經文を收めたといふ二尺五寸ばかりの鐵塔があつた。南蠻鐵で鑄たもので、今は、千手堂に收められてある。

道は、それから當然千手堂を經て中尊寺に向ふべきであるが、もしひまがあるならば常行堂の後の徑を辿つてみる。右手の池中に

【辨財天堂】——本尊辨財天十五童子——を見て、緩傾斜を登れば、草深い窪地に【獨鈷水】が湧出する。慈覺大師の加持水であるといふ云ひ傳へであるけれど眞僞は保證の限りでない。なほも徑を分けて上ればやがて

【塔山】の頂きに達するだらう。小松の茂つた小高い丘陵で、眺望は絶佳である。一時、此山全体を公園にすると云ふ計畫もあつたさうであるが、今はどうなつたか格別の沙汰を聞かない。それでも稚松の間に若い櫻が、そこゝに植えられて春は、しほらしい花をひらく。訪れる人もない山の上なのに晩春から初夏にかけては、美はしい山躑躅が艸を埋めて燃えるやうである。かくて、花が散り、艸は徒らに茂つて山は冴えざえしい艸の香に埋まつたまゝ眞夏を迎へる。そのとき、幸運にも此處を訪れるならば必ずやこの山に登つてみたまへ。山百合の花が道も狹に咲き匂ふ中に恍惚として立ちつくす自分の姿を諸君たちは見るだらう。

絶頂に上つて艸を藉き、さて東南に眼をやつて見給へ。束稻・觀音烏兎ケ森諸峯の連亙した東山一帶が青い靄を着て横はる中に磐井平野の一角が、海底のやうに開ける。北方前澤町の端れのあたりから大きく灣曲した北上川は衣川の水を合はせて高館の裾を洗ひ、八百年前の武者小路や屋敷趾を流れて寂びれた兩岸の畑の間を極めて緩かに進んでゆく。西岸の畑は麥や菜の花に彩られたり夏になれば麻の濃い匂ひを漂はしたりして、頂上からの眺めに一入の興趣を添へる。近く毛越寺の全景が壓縮されて鬱蒼とした杉の群がる合ひ間に大泉地が瞳のやうにのぞいたり朽ちた堂の屋根がみえたりする。その前面は廣い田で、田を越して面白い松並木の間に點綴する平泉の古驛を歴然と指呼する事が出來る。遙か東南にあたつて、蘭梅山の森かげに光る一關町の甍を夢のやうに認めることも出來るだらう。悠揚としたこの前景から瞳を展じて西を望めば波濤のやうに起伏した連山の彼方に、須川獄、祭部山、駒形山などの雄峯が、暗く胸を壓して迫るのを覺える。時に幽かな鳥海の頂きを見る日もある。暗鬱ではあるが、まことに雄大無比である。北は岩手山を影のごとくにのぞみ鈴掛山を越えて金

鶏山につゞく。けだし塔山は平泉の鳥瞰圖を繪のやうに展開してくれる點丈でも優に登山の價値はあるやうに思ふ。遺憾なことには艸深く徑も定かでないのが初めての人には登り難いかも知れないけれど。

山を下りて、中尊寺へ向ふ保勝道路をゆくことしばしで左手に朽ちた木標を見る。徑を一町も登れば金雞山の麓。

【千手堂】の境内に達する。木尊は定朝作の千手觀音だと云ふが、何うした原因か、絶對に見せない捉ださうだ。秀衡の木像や蛇形石法華鐵塔などがある。

毛越寺は大概その位で見つくしたやうに思ふが、只一二ケ所見逃した箇所がないでもない。毛越寺の入口から左に折れると

【國衡館跡】がある。秀衡の第一子西木戸太郎の邸趾で八花形とも云ふ。そこを一直線に達谷窟に向ふ方の道をゆけば勅使館跡などがある。しかし序でもない時の外には見るまでもないことと思ふ。

此一篇は毛越寺をつたへる上に於て、餘りに簡略にすぎたかもしれない。たゞ別項、平泉藝術史大要の中で簡單ではあるが、毛越寺の持つた建築や美術工藝の片鱗を總括的に含めて置いた。此一篇のうめ草ともなれば幸福に思ふ。（北虹）

芭蕉の碑『夏草やつはもの共が夢の跡』の句に因んだ名物『夢の跡』がある。お土産として絶好である（岩手縣一關大町關屋光月發賣）

平泉藝術史大要

平泉に於ける古代藝術の歴史的地位は、遠く平安朝の初期、慈覺大師が東奥巡錫のみぎりにその淵源を有する。

大師は、天臺宗の開祖傳教大師の高弟で、圓仁と云ひ下野の人、仁明天皇の朝入唐して天臺眞言の兩宗を學んだ。歸朝後、延曆寺の座主となつて兩宗の弘布に功あり、後濟度のため東奥に巡錫し、平泉の地を卜して嘉祥寺と毛越寺とを建立した。平泉が漸く史上にあらはれるやうになつたのは即ち此慈覺大師に源を持つてゐるのである。大師の遺骸は、今同じ西磐井郡厳美村字本寺（骨寺）の蓮花谷にある逆芝山に埋めたと云ふ。同所に一基の塔を殘してゐる。

大師が一代の高僧であることは史上に紛れもない事實であるが、又佛教藝術の殊勝者としてもおろそかにすることの出來ぬ人である。

當時本地垂跡説が勢力を占めた餘響を蒙り、大師も亦神佛混淆の説をとり多くの寺院の外に、白山宮、山王社（今佛に歸し釋迦堂となる）熊野宮、神明宮などを同時に此地に勸請した。それらの本尊を殆ど大師自ら彫まれたらしく、毛越寺の本尊、醫王善逝の靈像をはじめとし中尊寺大日堂の大日如來、もと白山宮の本尊であつた十一面觀音、藥師堂の本尊である藥師並びに日月光十二神將、寶庫に

ある延命地藏木像（登錄狀）などその數は實に夥しいものである。

けれども大師が東奥の藝術史上に殘した功績はむしろ他にある。なぜなら大師の中尊、毛越兩伽藍艸創は後世になつて藤原氏三代の文化史上に於ける偉大な功獻をかたちづくつた源であるから。

さうした由緒ある寺院が、慈覺大師の逝去後二百數十年を經て漸く頽廢に歸した。折よく、當時奥六郡を領して江刺郡豐田館にゐた藤原淸衡が嘉保元年平泉に移つて館をかまへることになつた。これが、平泉繁華の濫觴である。

先づ何より重大なのは、當時の藤原氏が現今ではとても想像できぬ程の富豪であつたことである。今でも附近至るところに金鑛の趾があるが、なほその頃の砂金の産出は恐らく吾人の想像を遠く超えてゐるらしい。しかも奥羽兩國で一万餘村を領してゐたといふからその威勢は、たしかに王者を凌ぐの慨があつたに相違ないのだ。

こゝが、平泉藝術をあれ程まで驚嘆すべき偉大さに高めることの出來た第一の點であると思ふ。云ふまでもなく富そのものが藝術の要素であるといふわけではないが、富の後援なしにそのかくれた力を發揮し得ない場合は甚だ多い。のみならず富の濫用を個人的悅樂に定限しないために、そして不朽なるものゝ悅びを多くの人々に頒つために藝術を盛ならしめる富の活用は、むしろ富あるものゝ一つの義務と云ふべきである。藤原三代は、たとへ當時の計畫が、おさへ難い豪者の反響としてほとば

しり出た個人的の喜びを滿足させるためのみ、行はれたものと假定したところで少しも非難されるべきものを持つてゐない。彼等のとつた方向は誤まらなかつたからである。正しい、生きることの喜びを手ぎはよく藝術の上にまきちらしたからである。

しかし、事實は、彼等の志はさうした小さな愉悅を目的とはしてゐなかつた。

こゝで當時の時代思想をみるために、ぜひとも眼を佛教の興隆の上におかなければならない。時代は白河法皇の勢力範圍にあり、法皇が過度の佛教心醉者であることは史上に紛れもない事實である。そして相ついで卽位された堀川、鳥羽の兩帝も劣らぬ佛教の擁護者であつた。

慈覺大師が中尊、毛越創建後、土地が丁度王城の鬼門にあたるとか云ふので歷代の祈願所として有名であつた。そのために、清衡の威勢が京師を壓するにつれて、祈願所再建の勅が下つたわけなのである。

清衡は佛法に篤く、早速巨万の富をかけて中尊寺の建立にとりかゝつた。堂塔四十餘宇、禪房は三百に餘つたと云ふ。白河關から以北外ケ濱に至るまで(當時二十餘日の行程を費したと云はれてゐる)の道路は一町毎に笠卒塔婆を立て、其面に金色の阿彌陀の像を畫いたと傳へられる。

これ丈でも、清衡が執つた計畫の大きいのに驚かされる。

西歐に限らず、古代藝術のある時期が、宗教を離れては考へられない、否宗教がなくては存在する

ことの出來ないやうに考へられることがある。比較的に人心が素朴で宗教的感化が、一般に普く浸みこんでゐる時代の藝術、卽ち古代藝術の殆どすべては是である。西歐では、それが基督教藝術となつてあらはれ、わが日本などでは夥しい佛教思想の表出として所謂佛教藝術が花咲いたのである。

しかし、考へてみると當時の藝術家の思想が根本的に佛教思想に浸潤され、さうした氣持を表現しないではゐられなくなつて筆を執つたと云ふよりは、(勿論さうした點である事は疑を容れないけれど)むしろ時代の外的要求により烈しく刺衝されて製作したと云ふ方が妥當だと思ふ。

當時の一般風潮と其實用的方面の嗜好に伴つて動かない藝術家があつたとするも、さうした極く少數の人は多分歷史の上からは永久に隱されてしまつたに相違ない。この點が、日本の古代藝術が多く佛教藝術としてのみ存續を可能とする所以ではないかと思ふ。

清衡が、建立した似藍は、金色堂を始めとし、經藏、釋迦堂、最勝王院など現在中尊寺が持つうちで最も誇りとするに足るものゝみである。

三代が、かやうに佛事に熱心であつたのは全く佛法を以て一般人民を教化し、そして自領の安靜を計らうとするにあつたのだと云ふ說もあるが、頷かれる言葉だと思ふ。

清衡には、かなり强い信仰が胸の中に燃えてゐたやうに考へられる。なぜなら、あの紺紙金、銀泥の一切經を八年かゝつて淨書さしたといふ辛抱强さが、單なる好奇的な虛榮心から起るとは考へられ

ないからである。更にあの寶塔の曼陀羅をみよ。要するに彼は單なる豪富でもなければ單純な武人でもなかつた。熱烈な信仰の人であり生の正しき享樂を知悉してゐた人であつた。

金色堂と經藏が藤原時代建築の模範として藝術史上に著名なのはこゝに繰りかへすまでもない。そして淸衡、、、創建の堂塔の本尊は、多く時の名工定朝の手になつてゐる。定朝は、平安朝第一の佛工で後一條の頃の人、その技術の卓拔をみとめられ特に法橋に叙せられた。金色堂の本尊、釋迦堂にある釋迦文珠普賢の三尊、その他寶庫にある大日如來像(登錄狀)多門天像などはその重なるものであらう。猶經藏の本尊は、毘首羯摩の作にかゝる。

第二代の基衡が建立したのは毛越寺で、金堂圓隆寺をはじめ七堂伽藍を計畫してその子秀衡の代に至つて完成した。

其莊嚴は、中尊寺を凌がうとし吾朝無双と稱せられたと云ふ。こゝに安置した佛像の殆どすべては定朝の次の一時期を劃する運慶の作である。當時圓隆寺の本尊であつた丈六の藥師及十二神將日月二天は彫刻の精妙なこと比類をみず、爲に鳥羽天皇は其像の洛外に運ばれるのを非常に惜しまれたが、基衡の懇願によつて辛うじて勅許になつたと云ふ。以て當時の佛像の優秀さを考へるに足りる。今運慶の作は多く中尊寺に散在してゐる。

毛越寺の藝術で忘れることの出來ないのは、嘉祥寺と無量光院並びに基衡の妻の建立した觀自在王

院とにあつたと云ふ壁畫である。

嘉祥寺は矢張基衡の建立にかゝるものだが、四壁並びに三面の扉に法華二十八部の大意を畫いたと云ふ。無量光院は秀衡が立てたので、矢張其四壁や扉に觀經の大意を畫き、その傍に秀衡自ら狩獵の圖をかいたさうである。秀衡はこの外、あの十界寶塔の曼陀羅の塔の傍にある繪を書いたとも傳へられてゐる。觀自在王院の方は、洛陽の名所靈地を壁畫としたと云ふけれど、すべて筆者は明でない。考へてみると、毛越寺の堂塔が燒失しなかつたならばあるひは遙かに中尊寺を凌駕しはしまいかと思はれる。

平泉藝術は平泉の御館の滅亡と共に衰微に歸した。今わづかに殘る遺蹟や遺物をとほして、私の頭に浮んで來るのは、當時の人々の心を流れてゐたらしい一脈の床しい流れである。それはあまりに華かなけれども餘りに夢幻に富むだ人々の佛所行讃のかげた。すべて其時代の人々が、終局する所一つの宗教と信仰で結ばれて、階級制度に囚はれもせず藝術と生活のすべての方面に於て互に生きる事の喜びを味つてゐた樣な氣がしてならない。是は單なる私一人の幻想だらうか。(北虹)

衣川の史蹟

【衣川】いまは、この衣川一帶の地は空しい田野と化してゐるから、一つも見るものなどは殘つて居らぬ、本當に芭蕉翁の句ぢやなくとも、まさしく『夢の跡』たるに過ぎないのである

とに角、平泉からは程なくの位置にあるのであるから、昔榮えた頃の有樣を華やかなものにしのび乍ら、ごろた石の多い川沿ひの道を歩いて見るのも、まるつきり興のないことではないであらう。

こゝに、その位置及び概說を千葉孫左衛門といふ人の編書から抄錄する。

『衣川は膽澤郡衣川村にして、東南は西磐井郡平泉村及び嚴美村と境を接し、古くより上衣川下衣川の二つに分れ、昔安倍貞任が居城を構へたる所なり、又延曆の頃奥夷征伐のため紀古佐美、池田眞牧、安倍墨繩等の東下せし時、衣川營を構へたる地も此地ならむか。

古跡

衣川　二源あり、一は膽澤郡衣川村高日王山より發して東南に流る、之を北股川といふ。一は同村の西南淸水大森の山間より發して東南に流る、之を南股川といふ。此二川衣の館（安倍館ともいふ）の下に至りて相合し、（此所を落合又百袋ともいふ）泉ケ城（泉三郎忠衡の居館）を繞回し、中尊寺の

北麓を經て北上川に注ぐ。』（以上原文のまゝ）

水源高日王山に五輪石といふ大石がある。その高さは凡そ十丈餘りもあるかと思はれる。往昔この石の上に天人が降りて天の羽衣を乾したのだといひ傳へられてゐる。衣川の名はこれに因るものであるさうな。そして、またこの五石輪の中間に慈覺大師の戒行した所だといふ疊程の廣さの岩洞がある。だが、この邊りまで旅杖を洩く人などは殆んど無いのである。

【浪洗】昔時、このほとりを衣川が流れてゐたのであるといふ。其頃岸に生えてゐた松といふのがのこつてゐたさうであるが、今は枯死して了つて、しのぶべき何物も止めてゐない。

西行法師は、そのあたりを

ころも川汀によりてたつ浪は岸の松が根洗ふなりけり

と詠んでゐる。

【大石ケ澤】これも『浪洗』と同じく空しい跡なのであるが、昔、このほとり一體はひろやかな沼で大龜が住んでゐたものだといふ話。そこには今だに巨石がのこつてゐて、田となつてゐる。

【舊市場跡】衣川全盛の頃、其市街の中程にあつた。それは六日市場、七日市場、八日市場等、其跡であるのだが、いまはたゞ木標が建てられてゐるのみで、そのあたりは草が深い。

【櫻跡】又大櫻ともいふ。これは昔南蘇坊といふ行脚僧が、大和の吉野から携へて來た櫻を此所

に植えたものでこの名があるのだと。

【衣の關跡】　千葉孫左工門といふ人の編書によると、『衣川柵の東南に續きたる平坦の地なり』とある、而してまた、高平眞藤の『平泉志』には次のやうに記されてある、『東鑑に西白川の關に至り東外濱を限り各十餘日の行程にして關門を立て衣關と名づくとあり、（一說に膽澤郡白鳥村鵜木と云ふ所に關の跡あり其傍に關山明神あり今之を關門宅と云ふと按に其地勢中尊寺の西部は險隘にして古來同寺の山號を關山と號し寺塔建立の時に中間に關路を開き旅人往還の道となすと言傳へ さて金色堂の西方に力て關神社あり中古、北野神社を配祀せしが今は觀音堂となせり此堂の北の麓に關の跡あれば此處なりしこと論なし――以下略）

多分、いまの舊道（平泉村より瀨原を經て膽澤郡前澤町に到る）のほとりにあるものであらう。種々の說があるので、此場合自分は、その何れともいひなすことは出來ないのである。

こゝには數多の詠歌がある。

今よりのかすみもさこそたちぬらめ衣の里に春し來ぬれば　　鷹司院按察

夜をかさね深山たち出るほとゝきす衣のさとに來つゝなくなり　　平爲盛

もろともにたゝましものをみちのくの衣の關をよそに見るかな　　和泉式部

みやこいてゝ立かへるべき程ちかみ衣の關をけふそとひぬる　　大藏卿行任

たひゝとのころもの關をはるばると都へたてゝ幾日來ぬらん　　衣笠內大臣

あとたえて人も通はぬひとり寢の衣の關をもる涙かな　　前參議忠定

ゆく人もえそあけやらぬ吹きかへす衣の關のけさのあらしに　　贈從三位爲子

花の香をゆくてにとめよ旅人の衣の關の春のやまかせ　　大納言經成

旅寢する衣の關をもるものははるはる來ぬる涙なりけり　　津守國助

しらくものよそにきゝしをみちのくの衣の關を來てぞ越ぬる　　藤原顯仲朝臣

ちりかゝる紅葉のにしきうへにきて衣の關をすぐる旅人　　土御門內大臣

【衣川柵跡】　平坦の地でそれを回るあたりに、堀の跡らしいものがある。位置は恰度、現在衣川橋の架つてゐるあたりから五六丁ばかり川上にあたつてゐるところ、其對岸は、後三年の役に、藤原業近が立籠つたといふ琵琶の柵の跡である、見るべきものは、石つころ一つも殘つては居らぬ。肅々として吹きすぐる秋風の音に寂びしい感慨がわくのみである。

【吉次屋敷跡】　下衣川にある。三條吉次信高の居所の跡であるといひ傳へられて、其館門の礎らしいものは今だに殘つてゐる。そして此邊りを長者ケ原と呼んでゐる。この三條吉次信高といふのは俗に金賣吉次と呼んで其當時金銀を賣買する商人であつたものらしい。そして京都へは屢々上つたものであるらしく、鞍馬山に詣でゝ牛若丸に合ひ、遂にかれを伴つて平泉へと立歸り、秀衡に面謁させ

た、其功を嘉して、彼吉次に秀衡がその居所をば與へたものだといふ。

【衣の館】 高さ三十丈餘、其構造凹字形にして階段あり。東南北の三面は衣川（南股川と北股川との三川館の下にて合す）にて圍み、西は山嶽蜿蜒し頗る要害の地なり。是れ安倍氏累代の居城にして又鮮鶴館と號す。（以下略）』以上は千葉孫左工門といふ人の編書から抄書したものであるが、斯うした遺跡は、要するに望見するだけで充分であるのだから、詳しい道順などはこゝには記さないことにする。

【石生坂】 また、一首坂ともいふ。それは次のやうな戰蹟に由緣するものである。

康平五年の役に、琵琶の柵の陷つたことを逸早く耳にした貞任は、衣川の柵をば弟宗任に守らしめて、ひそかに館を遁れ出たのであつたが、彼貞任が馬に切りと鞭をあて乍ら、この坂路にかゝつた時それと感知した義家は逃がさしめずと、その跡を追ふて馬を走らしてきたので、忽ち二人の間は物の一丁とも離れ距たぬまでに近付いた。

その日は丁度、連日の降雨もからりと霽れあがつて、路の果には陽炎さへもゆらめいて見える程の好晴で、しかも正午を少しく過ぎた程の刻限であつた。

義家はまづ馬の足踏をしつかりと踏み、馬を駈けらしつゞけて居たが、やがて立止つて朗らかな聲に、

『遁るゝは貞任と見えたり、武士として脊後を見するは卑怯であるぞ。引返せ、引返せ……』と呼はつた。

すると、間近に馬を引返して貞任は、巨軀を伸びやかにし、

『われは如何にも厨川次郎貞任に相違ない。おんみは如何なるものか？　名乘りを揚げよ！』と大聲を揚げた。

そこで、義家はからからと打笑つて、

『おんみを追ふは、もとより雜兵の輩ならず、八幡太郎義家なるぞ……』

斯ういつて義家は弦に矢を番へてきりきりと打絞り『如何に貞任、われはいま和歌を思ひ浮べたり……心を沈めて承はれよ……衣の館は綻びにけり。……如何ぢや！』

すると、貞任は少しも怯む氣色もなく、聲朗らかに、これも亦、弓に矢を番へて

『年を經し絲の亂れの苦しさに……』

と斯う上の句を返して、お互ひが同時に弦を打はなした。處が義家の放つた矢は貞任の兜の頂をかすれて遠く飛び、貞任の矢もまた義家の肩の邊をすれ〳〵に外れて飛んだ、そこで貞任は何を思つたか、義家を嘲けるやうな笑ひを洩らして、

『我朝一の弓道の名人と謳はるゝ義家が、この射損ひは何事ぢや。』と、斯う云つた。

すると、義家はしづかに、

『誤まるな、貞任、われ一度狙ひをさだめたるからには、一筋の矢にも射損じありし試しはない！』

斯ういふ義家の腹中を尙も讀みかねたものか、貞任は再び嘲笑を浮べて、

『おゝ、さらば再び射て見よ……』

すると、義家はあはれむ如く、

『貞任とあらうものが、武士道を辨へぬとは情けない。吾がいま放ちて外らしたる矢は、おんみを逃さむ情けなるに……』

それを耳にした時、貞任は恥ぢ入るやうに目禮して、

『さらば、後日必ず會するの時を約し申さう！』

斯う言ひ放つと、やがて彼は唯一騎、石生坂のながてを遠く去つて了つた。と。

所謂、往昔衣の里と稱した一帶の地には、數に上り切れない程の遺趾があるのではあるが、こゝでは記事の錯輳を避けて、すべて略すことゝした。（青花）

達谷窟

【達谷窟】　こゝは恰度、（一關驛を起點として發足すれば）嚴美溪を經て平泉へと迂回してゐる保勝道路の途中にあたつてゐるので、序でに觀らるゝに、非常に都合がいゝ。一關を朝の九時頃にでも出掛けると、こゝには正午過ぎまでに着くやうになる。それは無論嚴美溪で二時間の餘も遊びくらし、晝食をも濟してからの上に、歩き出してゞある。嚴美溪から、達谷窟までは三十丁弱で、道路も大して困難ではない。はじめは田畔道で、それがやがて一寸した山路にかゝる。道は里程からいつても、さう遠いものではないのであるから、同伴者でもあつて話合ひながら歩くものならば、本當に譯もないことなのである。

やがて間もなくして、達谷窟の遠く眺められるあたりまで來ると、胸は昔懷かしい思ひによつて充たされる。窟は、極めて巧妙につくられたものであるとのことで、そこには往昔、蝦夷の酋長惡路王が棲つてゐたものだといふ。この說は確然と歷史の上に殘つてゐるのであるから、一寸も疑ふべき餘地はないのである。その窟には可成り巨大な堂が、精巧な建築法によつて建てられてある。

【毘沙門堂】　といふのである　この堂の大きさは九間四面であつて、これは桓武天皇の御宇延曆二十年に征夷大將軍坂上田村麿が、勅を奉じて賊を平治し、祈願成就の報塞として、建立したものだと

いふ。それはかの山城の鞍馬寺に模してつくり、中に百八體の多門天を安置したものださうである。いまの堂宇は、其後になつて藤原氏が再建したものを、更に伊達家が修繕を加へたものであるといふから、果してその當時のものと形式などが同一であるか何うかは判明しない、が、佛像は未だに現存してゐる。そのうちで、登錄狀を有するものは毘沙門天、五尺五寸七分一體と、同じく八尺五寸五分一體とである。そして佛像は全部毘沙門天であつて、いまは完全に殘つてゐるものは少なく、百八體あるか何うかも疑はしい。確かなところ、百體に充たないかも知れぬ。が、とも角、尊いものであることは、こゝに言ふまでもないのである。

堂は、右方と左方とから階段によつてのぼるやうになつてゐる。安置されてある毘沙門天の尊像を拜觀したい人は、直ぐこの堂から、北に離れたところにある、別當の眞鏡山西光寺を訪れて、その由をば乞ふがいゝ。さうすれば、重々しく卸された錠を下し、案内者は、中へと導き入れて、しんせつな說明をばきかしてくれる。こゝの拜觀料は一人五錢宛である。

【眞鏡山西光寺】 これは、毘沙門堂の別當であつて、天台宗であり、大同二年圓珍僧都の開基にかゝるものである。そして、その本堂は坂上田村麿が建立したものであるといふが、其後も藤原清衡以下二代までの間、數多の坊舍堂塔等を造營したのださうである。けれど、忽ち天正年間の兵燹にかゝつて燒失して了つた。いまは、その俤だも見ることができないのである。

【岩面大佛】 窟の左方に南面してゐる岩壁に彫られた大日如來である。高さは凡そ五丈近くもある。だが惜しむべくも、いまは風雨のためにか、人知らぬ間に崩れ落ちて、僅かに、その胸部より上をのこしてゐるのみである。これは康平年間の役（即ち歷史に有名な後三年の役）に、東夷のすべてをば征し盡した源義家が、己が部下より出した多數の戰死者のために墓碑に代へてつくつたものであるといふ。俗間には、義家が矢の根をもつてこれを彫つたのだといふ傳へもあるけれど、これは全くの虛言であるらしい。實際に、この岩面を仰げば解ることなのだが、まつたく、この彫法などをそれともなく見極めると、たしかにその當時の專門家の手になつたものであることが知れる。とに角、嚴かなものであることは、いふまでもないことである。こゝら一帶は朝夕の別ちなく松風の音がさびしい。

この他に、天明六年に建立して、不動尊（智證大師の作なり）をまつてある不動堂や、蝦蟇池の中島に建立された辨天堂（本尊（慈覺大師の作なり）及十五童子を安置せり）や、神明社跡、鹿島社、田村社跡等があるが、もとより見るべき價値の存するものではない。それから、高さ幾丈かの岩上に、惡路王が手をかけて官軍の動靜を窺つたところから、其名の出たといふ手掛松や、身に其形狀の似たところから、傘松と呼びなす松などもあるさうであるが、それはたゞ昔をしのぶよすがたるに過ぎぬ。

【姫待瀧】 窟の東北方にあたる保勝道路のほとりにあるので、容易に奇趣をば眺め得られる。高さ凡そ二丈餘、其周圍は、あま　感心した風致でないけれど瀧だけは、まつたくいゝ　殊に夏の涼

葉時から秋の紅葉の頃にかけて、其景趣がすぐれてゐる。瀧の名は、悪路王の賊徒が貴紳富豪を脅かしては、美くしく若い娘や、人妻などを掠奪して、それをこの瀧のほとりに待迎へるやうなことが屢々あつた故に、呼びなされたものであるといふ。藤の花の咲く頃など行つてみると、その瀧壺に村の子供等が岩の上から飛び込んで、泳ぎ廻つたりしてゐる。

やがて、瀧の音のとゞろく邊りをゆき過ぎると、そこに奇狀をなした巨石を見出すであらう。その巨石は『鬘石』と呼んでゐる。名の起因は、悪路王をはじめ、數多の賊徒共が、婦女の鬘を吊したところから出てゐる。いまは、その巨石の裂け目から、樫か何んかゞ生ひ伸びて、巨幹を空に聳やかしてゐる。それを見て過ぐる頃、人はいつか道の平凡になつてゐることに心附かるゝに違ひない。こゝから平泉の毛越寺までにゆき着くには、一寸一里計りの道程を歩まねばならない。（青花）

達谷窟の名物ではないけれど、坂上田村麿將軍の名に因んだ名物田村の梅や、田村もちがある。（岩手縣一關地主町松榮堂本店發賣）

嚴美溪

【嚴美溪】一關町を起點として、西方に二里半入つたところに、花の名所としてきこゆる嚴美溪がある。この嚴美溪へは、平泉の方面からも見に來ることは出來るのであるけれど、何れかといふと、一關からの方が都合がいゝのである。

幸田露伴の『易心後語』の一節に

『……大町・地主町を駈け拔けて磐井の川の假橋を渡れば・花川戸とかや申して、主に旅の衆に投げの情けをかけまくも、かしこき手管ありや無しや、女郎達の居玉ふところなり、……』とある。

再び『易心後語』の一節を抄く、

『……これより鍛冶町竹山橋、次第々々にごろ〳〵した石多き路を辿りて田圃の間を行けば、里の子の用水に泳ぐ、水車の輾る、いづれ田舍の常態ながら面白し、……』

鍛冶町といふのは、橋を渡つて間もなく北に折れたところで、こゝからは、既に一關町ではなく山目村である。竹山橋といふのは、磐井川に注ぎ入る小さな枝川にかゝつてゐる橋であつて、やがて道はその橋を渡ると、西にむかつて進むやうになつてゐる。竹山橋の袂には『保勝道路』を刻んだ石の指導標が立てられてある。

その指導標によつて、すゝめば決して間違ひはない。そしてこゝからの道は、いまゝでとは異つて露伴の所謂、『ごろた石多き路』である、橋を渡つて間もなくの所に製絲場がある。道は一寸の間この製絲場のほとりに沿ふてゐるのである。途中は割合に單調過ぎる位であるけれど、それだけ足には樂である。だからこの絶勝を探ることは、女や子供の足弱にも容易である。

やがて、嚴美の村へと入りかけるあたりを、露伴は斯う書いてゐる。

『……杭打坂を下りて上り沓ケ鼻とかいふ處に至れば、對岸の岩聳えて、潭水靜かに湛えたる景色眼覺る心地す、……』

それから、嚴美溪のほりとを、

『……軈て五串に着けば、聞きしに違はで、流水の態も尋常ならず、とある家に一と憩して後溪のほとりを漫歩し、徐に眼を轉じて水激し嚴叫ぶ力を視下すに、谷を成す皆石なりといつても好き程岩石重疊して、赤松其が上に生ひ、碧水其罅を行く風情、まことに塵外の想を發せしむ、天工と名づくる橋ありて構造も俗惡ならず、岩より岩に架け渡せるさま畫中のものなり、それを渡りて左すれば、小やかなる堂めきたるものありて觀覽に便宜となるあるにぞ下駄脱ぎ捨て、上り込み、勾欄に頼杖突つ張りながら觀れば觀るほど、よい景色にて、少しく木曾の寢覺に似て、趣きはまた大に異なれり、彼は溪遂くして水に遠く、臨川寺よりはた〻對ひの右に立てる河中の石の狀の奇なる、淵の蒼々たる水

の尾の瀨をして奔るを觀るに過ぎねど、此溪遂からで水に近く橋よりは瀧を見るべく堂よりは瀨を見るべし淵の深き岩の奇なる、殊更岩の上に老松幾株翠を凝せる、水の幾派にも分れて流るゝ、固より此彼れに優るとは云ひ難きも彼終に此が兄たりとは却て中々に稱しがたし、……』と。

溪流中一の美觀と稱せられてゐるのは、玉垂の瀧である。その沫散る岩上に腰を据えながらはるけく西方に眸を放てば、そこには紫に薄霞む須川の靈峯の打連りつゝそびえてゐるのが眺められる。それが、若し春四月の候であつたならば、興趣は更に深い。

……直下十丈の餘もあらうと思はれるその飛瀑が、轟然として打とゞろくに、これは亦何んといふやさしさであらう――櫻の花片がはらはらと散る。ある年の春の一日、私は友人のKと共にゆるやかな散策を試みたことがある。そして、私達は巖の上にゐた……

『ねえ、君、對岸の家へ團子でも喰ひに行かないか。こゝへきて團子を喰はずに歸つたんぢや、折角花見に來た甲斐がないといふもんだ。』

『矢張り、あの何年か前に喰べた團子の味が忘れられないと見えるね。ぢや、いまから喰ひに行かう！』

對岸の少し小高い道のほとりの二階家から、こちらの岸の岩の上へと一筋の太い針金が傳へられてゐる。これは田舍の人のあたまとしては珍らしい、團子を荒の中に入れて對岸からこつち岸へと運搬

するの用に備へたケーブルカーだといふ。

こつちの岸に立つて、試みにその傳はつてゐる針金を打振ると、その二階の軒端に、色の黒い爺の顔があわてた様に現はれる。そして、笊を端に括り付けた細綱をさら〳〵とほぐしはじめる。やがてその笊がこつちの岸の岩の上へと送られるのである。笊の中には石盤が入れてある。それに何んなりとお望みのものを書いて呉れといふのである。遊びに來た人達は面白半分にいろいろなことを書いて弄かふ。

私達は、兎に角對岸のその二階家へと團子を喰ひにゆくことにした。

渓流に架つてゐる天工橋といふのを渡つてゆくと、直ぐ橋の袂に交番がある。開け放たれた窓からは、顔一杯に髭を生やした巡査が倦み疲れた様な面持で、茫然と外面を眺めてゐる。

私達は、やがて道のほとりに咲き綻びてゐる櫻の枝を、伸び上つてはへし折つたりしながら、團子を商ふ二階家へと入つた。

美味、不味は問題外として、團子はこゝの名物である。

……私達は、それから種々なことを爺からきいて、その家を出た。

道傍の家々には何處にも此處にも、酒に醉ひしれた男女が唄つたり騒いだりしてゐる。酒を飲らないものゝ眼から見ると、本當にそれは馬鹿げた戯れの骨頂としか思はれない。

私達の歩いてゆく道の上に、亦一切り花が散り舞ふ。

『ねえ、君。こゝなんだね、小松の瀧つていふのは……』

私は、やがて渓の流れへと下る道をそこに見出すと、斯ういつてKを顧みた。

『あゝ、こゝだ。此前來た時も下りて見たことがあるんだ！』

Kが斯ういひながら先きに立つて下りはじめた。下りてゆく岩間には若草が柔らかに萠えて、蒲公英が浮き漂ふげに咲いてゐる。

私達は、岩間から岩間を傳ふて、漸くと小松の瀧のほとりに來た。

瀧といつても　それはほんに一間位の高さもあるか無いか位のものである、が、何うしたものか、瀧壺が渦を巻いて、眞白い泡をつくつて、暗い碧の色を湛へてゐる。

直ぐその瀧壺にのぞんだ、極めて平面な岩の上に、私達は凝としてうづくまつた。

岩には、ほつかりとした陽のぬくみが殘つてゐて、ほのかなかなしみが自づと湧くのを覺えずにはゐられなかつた。

時折に、渓流を腹も擦れ擦れに岩燕が飛び交ふ。羽返りをする毎に、眼に快い紫紺の羽色がかすかな走りを見せる。

そこから少し川上の天工橋を往來する人の群が、亂れ合ふ下駄の歯音によつてそれと知れる。いま

からが本當に人の出さかる時なのであらう。

私達は、それから暫く默つたまゝに、岩間を流れて來ては、その謎のやうな暗い碧の瀧壺に落ち込む水の滑らかな膚の光りを凝視めてゐた。

私は、さうした靜けさの中に凝として浸つてゐながら、この小松の瀧にまつはるローマンスを思つた。

……昔、京都に修業に上つた若い僧があつた。僧は世にも稀な美男であつたさうである。それがふとした機會によつて武家の娘と戀に陷つたのであつた。彼に思ひを寄せた美女の名は小松といふのであつたのだ。所が、その美男の僧は急な用事の下に、何うしても故郷のみちのくに歸らねばならぬことになつた。二人の身にとつてそれが何れ程にかなしかつたことであらう。それは、彼の美男の僧がいよ〳〵明日が旅立ちと定まつたその前夜、いつもの如くに忍び逢ふた二人は、限りなき別れの悲しみを張り裂くるやうな胸にかき抱きつゝ、止度もなく流れ出る涙を何うすることも出來なかつた。

僧は、やがて衣の襟をかき合すと、

『のう、小松どの。いとしいそなたの身をこゝに殘して置きながら、何うして己が身一人が快い月日を送られるものか。……まゝ左樣な歎きはなされまじいぞ、歎きに身をそこなうたら、それこそ大事ぢや。そのところをよう辨へて必ず短慮はなされますな……』と斯う慰めつくしたが、慰むる己れの

方が却つて泪がしげく頰を傳ふを覺えた。武家の育ちとはいへ、小松も世並の女性であつたものと見えて、それ位の言葉ではなか〳〵に思ひ納まる氣色もなげであつた。……やがて西と東に袂を分つべきの時が來た。美男の僧はそのまゝに盡きぬ名殘を惜しみ乍ら、故郷なるみちのくへと心ざして長い旅路にのぼつたのであつた。

彼は朝に快い草鞋を踏み締め、夕べは滋き草の露に衣の袖をぬらしつゝも、思ふは京に殘してきた戀人小松が身の上であつた。

小松とても、旅の假寢に淡い夢を結ぶ、美男の僧が身を何れ程に思ひ煩つてゐたことであらう。

やがて、幾月かの後に、僧は故郷なるみちのくに至り着くことが出來た。彼は取りすがらるゝ袂を泪乍らに振り拂ふた法衣の黑染をそのまゝの心に、專心み佛に仕へる身とはなつて、しぜん京に殘してきた戀人小松に對する火の如き執念の薄らぐを覺えるのであつた。

やがて、みちのくにも春が訪れてきた。

野の果には陽炎が萠えて、山には霞が棚引きそめた。溪流のほとりには櫻が咲き亂れた。さうして雲雀が晴れわつた、青空を我物顏に長閑な囀りをつゞけるやうになつた。

快い風が唄ひつゝ過ぐる旅人の袂を押ひるがへしつゝ吹くある日のこと、みちのくには到底見ることの出來ぬ程の美女が、旅疲れのした身を馬の脊にゆすぶられつゝ、溪流のほとりへとやつて來た。

美女は愁はしげな面持で、何か人をでも尋ねてゐるやうに見えた。

その美女が、ゆきずりの村人に、さういつて訊ねてゐる處をきけば、彼女はたしかに先頃京から立歸つたばかりの美男の僧をたづねて、はる〳〵と旅路にのぼつたものであるらしかつた。

村人達は馬の脊に跨つたこの見慣れない京女を一目見たばかりに、かの修業に上つてやがて立歸つて來た僧との間に必ず戀の糸のもつれ合つてゐるに違ひないことを見て取ると、つれなくも彼女に對しては何んの取柄にもならぬ樣な言葉をもつてあしらふのであつた。

そんな風で、僧の所在は皆くれ知れなかつた。西を見ても、東を振返つても、頼りなくつれないものばかりであつた。

さりとて、そのまゝに京へと立戻らるべき身でないことを知つてゐた美女小松は、夕づいてほのぼのと霞のたちこむる溪の流れへと馬を乘り入れた。もう誰一人として彼女に聲をかけて呉れる村人もなかつた。

小松は馬の脊から凝として花片の浮いて流れる水の面を凝視てゐたが、やがて何を思つたのか、そのまゝに碧渦卷く瀧壺へと馬の蹄を辷らして了つた。馬はかなしげに最後を嘶き立てた。脊に跨つた美女小松は鈴を張詰めたやうな双眼にあふるゝ如き露を宿しながら、きつと暮色の濃くなりまさりゆく溪間を見めぐらした。

櫻が亦、風もないのに一切り散り亂れて溪流にその花片を浮めた。

やがてして美女小松の身は馬と共に水底深く打沈んで、そこには物哀れな水泡が白く生れてゐるのみであつた。……

斯うした物語が今も尙傳つてゐて、そのむくり〳〵と湧きあがる瀧壺の碧が、見るものをして、一種不可思議の神祕感を起さしめずにはおかぬ。

私は幾百年か前にその玉の緒をこの水底に絶つた美女小松がその遣る方ない恨みに埋れた胸中を思ひやつて、泪ぐましさを覺えずにはゐられなかつた。

先づ、嚴美溪はこれ位のところに切り上げて、今度は、北方に二十數丁ばかり奥まつたところにある、惡路王の史蹟として名高い、達谷窟を探らるゝがいゝ。（青花）

須川温泉

須川温泉は一關町の西約十里、須川嶽の背面(八合目)に湧出する。一關から約二里半、嚴美溪の絶勝を經て道はしばらく磐井川の左岸に沿ふて走る。道は決して平坦ではないが、沿岸の風光は、おそらく人々を倦ましめないだらう。やがて山谷猪岡、などの村々を經て、周圍は廣漠たる裾野となる。火山灰を夥しく含んだ軟かな艸原は、身の長ほどの灌木に埋まり乍ら、次第に近づく須川の雄姿を隱見する。山は次第に身に近く迫つて來るが、裾野は果しもなく、眞夏の頃ならば、夏雪草や山百合の密生が溫るい風にまじつて匂ふだらう。マルバシモツケ、ヨツバヒヨドリ、シロバナタウチサウ、クロヅルなどの香ひも、ほのかにする。眞夏の艸原を吹く風は決して單色ではない。風の匂ひのなかに水晶が光り、麴が醱酵する、艸と風の神祕をかぎわけろ。さうすれば、決して單調を感じはしないだらう。平泉野といふのが裾野の一部になつてゐると思ふ。そのあたりに本寺(骨寺とかく)といふ村がある。こゝの逆芝山に慈覺大師の古塚があり、西行庵址や、平泉の名の本源であると云ふ泉なども ある。かくて須川山麓、瑞山に達する。一關より五里、旅舍が數軒ある。

此處から四里ばかり嶮はしい山道を越えて須川温泉に着く。一關を未明に立てば、その頃丁度日が昏れる。

【新湯温泉】を經てゆく裏道は少し遠いが、道は比較にならない程樂だ。新湯に一泊して出かけることも出來るから。新湯は無色透明の温泉で磐井川が切り斷つたやうな絶壁を洗ひ乍ら流れる、その狹小な岸の上に一二軒の湯舍がある筈だ。そのあたりの風光は、たしかに絶佳である。その新湯と瑞山間の國有林の壯大さにはおどろく。その林の中で私が珍しく思つた植物は、無氣味な黑百合の花と竹紙のやうな葉を持つタマガハホトトギスである。山獨活とゆづり葉も非常に多い。

瑞山から須川に至る本道は、慥か花袋氏も驚いてゐられたとほり、珍しいほど無骨でしかも險阻だ。山麓には眞夏の頃ヤグルマとアマチヤの青い花が咲く。山腹の蓊鬱たる樹木のかげに中小屋があつて休憩する事が出來る。山は五千數百尺、忽ち霧が湧き雨がどしやぶりに降るけれど、灌木帶を出放れさへすれば、大した事はない。

ノギランやイハシヤウブが道を埋めて咲き石楠の密生をみるやうになれば、やがてほのかな硫黄の香をかぐ。

【須川温泉】は、西磐井郡嚴美村に屬し、秋田との縣境に近い、

五月初旬に山を開き立冬の頃閉山する。近年温泉の名聲が頓に上り、日本全國からの浴客で賑はふと云ふ。

呼吸器病、胃病、神經諸病、皮膚病などに特効があるので名高い。

浴場から約二町ばかり東に凡そ二十餘の噴氣孔がある。「蒸し場」と云ひ全國温泉中唯一の箇所だと云ふ。孔の口に藁をつめた上に毛布や蓆を敷いて横はり、患部に湯氣をあてるのだ。特効があると云ふ。

湯の池、は面積約千坪ばかりある肺患者がこゝに浴して全快したと云ふので有名である。

大日岩、は下の湯の背後に屹立する數丈の奇岩である。

猶附近にもと三井で經營した硫黄鑛のあとがあり今でも其廢墟のあたりには硫黄が無盡藏に露出してゐる。廢墟をやゝ東方にゆけば血の池、賽の河原、十七坂などと云ふ名所がある。

須川岳(栗駒嶽)の絶頂に到るには温泉から數道あるが、いづれも雪渓をわたつたり、はひまつの海を泳いだりしなければならない。二重式層狀火山とか云ふのださうで、最高峯を大日岳(一六〇〇米突)と云ひ其北に劒山(一一〇〇米突)が針のやうに尖つてゐる、那須火山脈中の一雄峰である。削剝作用によつて圓錐狀の原形は失はれ、火口も明瞭でない。

温泉の位置は劒山の西北麓に當る。鳥海山が眞西にあたつて美しい山容を見せてゐる。

浴場は、瀧の湯と下の湯に分れ、硫化水素を多量に包含してゐるために綠色を帶び、溢れて湯の川となり磐井川の水源となる。湯の花が川床に咲いて美しい。

浴室は決して立派なものぢやないけれど頑丈なこと丈は事實である。自炊でも旅籠でも相談次第で

あるが、高山にあるため一般に質朴で決して經費のかさむやうな事はない。それ丈無聊ではあるけれど。

山中には七月半ば頃から八月始めにかけて高山植物が咲き亂れる。須川嶽特有の高山植物は、まだ發見されないやうに記憶してゐるが、あのお花畑の美しさ丈は、いくらほめても賞め足りないやうな氣がする。數年前兩度にわたつて植物採集をしてみたが、其一部の標本が一關中學校に置いたまゝになつてゐるので今分明するものだけ列擧してみる。(不滿足ではあるけれど仕方がない。)

ヒカゲノカヅラ、マンネンスギ(石松類)、マヒヅルサウ、イハシヤウブ、ノギラン(百合科)、タカネサギサウ、スゞラン、ハクサンチドリ(蘭科)、コメツヽジ、アカモノ、シロモノ、ミヤマホツヽジ、コメバツガザクラ、ミネズワウ、クロウスゴ、イハヒゲ、シヤクナゲ(石楠科)、ガンカウラン(岩高蘭科)、イハカヾミ(岩梅科)、ツマトリサウ(櫻草科)、マウセンゴケ(茅藻苔科)、ミヤマカラマツサウ(毛茛科)、ヒメオトギリ(金絲桃科)、シラネニンジン(繖形科)、コバノヱイランタイ(地衣類)、クサゴケ(蘚類)

其他、

サンカヨウ、イハウチハ、イチヤウラン、ミヤマヤナギ、コケモモ、ミヤマリンドウ、ダイモンジサウ、イハイテウ、ゴゼンタチバナ、ムシトリスミレ、ナナカマド、ハイマツ、シモフリマツ、ヒメ

コマツ、など。

歌がある。二三。

綾むしろ誰かしきけん久方の雲より上の山の岩根に　高平眞藤

みちのくの栗駒山のほほの木は花より葉こそ奇しかりける　讀人不知

天きらひ雲わきのぼる高山の底つ岩根ゆみ湯わきとよむ　平澤渚園

（北眞）

平泉めぐり 終

大正十年九月三日印刷
大正十年九月十日發行 五

平泉めぐり
定價四拾錢

編者　千葉青花
　　矢野北虹

發行者　岩手縣一關町地主町卅七番地
　　伊藤伊助

印刷者　東京市神田區今川小路三ノ二
　　橋本要吉

印刷所　東京市神田區今川小路三ノ二
　　株式會社一匡印刷所

發行所　岩手縣一關町地主町三十七番地
　　將文堂書店
　　振替東京　壹參八參八番

不許複製

千葉青花氏著　生田蝶介先生序

近刊

光り堂物語

菊半截美裝
内容新鑄九ポイント活字紙
數二百數十頁
定價金九十錢
送料金八錢

内容

回光り堂物語。
回義經の最期。
回貞任と義家。
回溪流に浮ぶ花片。
回忠衡の戀。
回惡路王の話。

年少なる著書はわが文壇に獨自の境を開拓しつゝ、いま此書を編む。純創作にして純創作にあらず、純歷史小說にして純歷史小說にあらず、その詞句の華麗にして清新なる、むしろ『物語詩』と謂はむか。高踏的の讀物として敢て薦むる所以なり。

岩手縣一關町主地町三十七
將文堂書店
振替東京一三八三八

三萬石の城下の名殘り

永世の馨り
田村の梅（一關名物）

永世の譽れ
田村もち（一關名物）

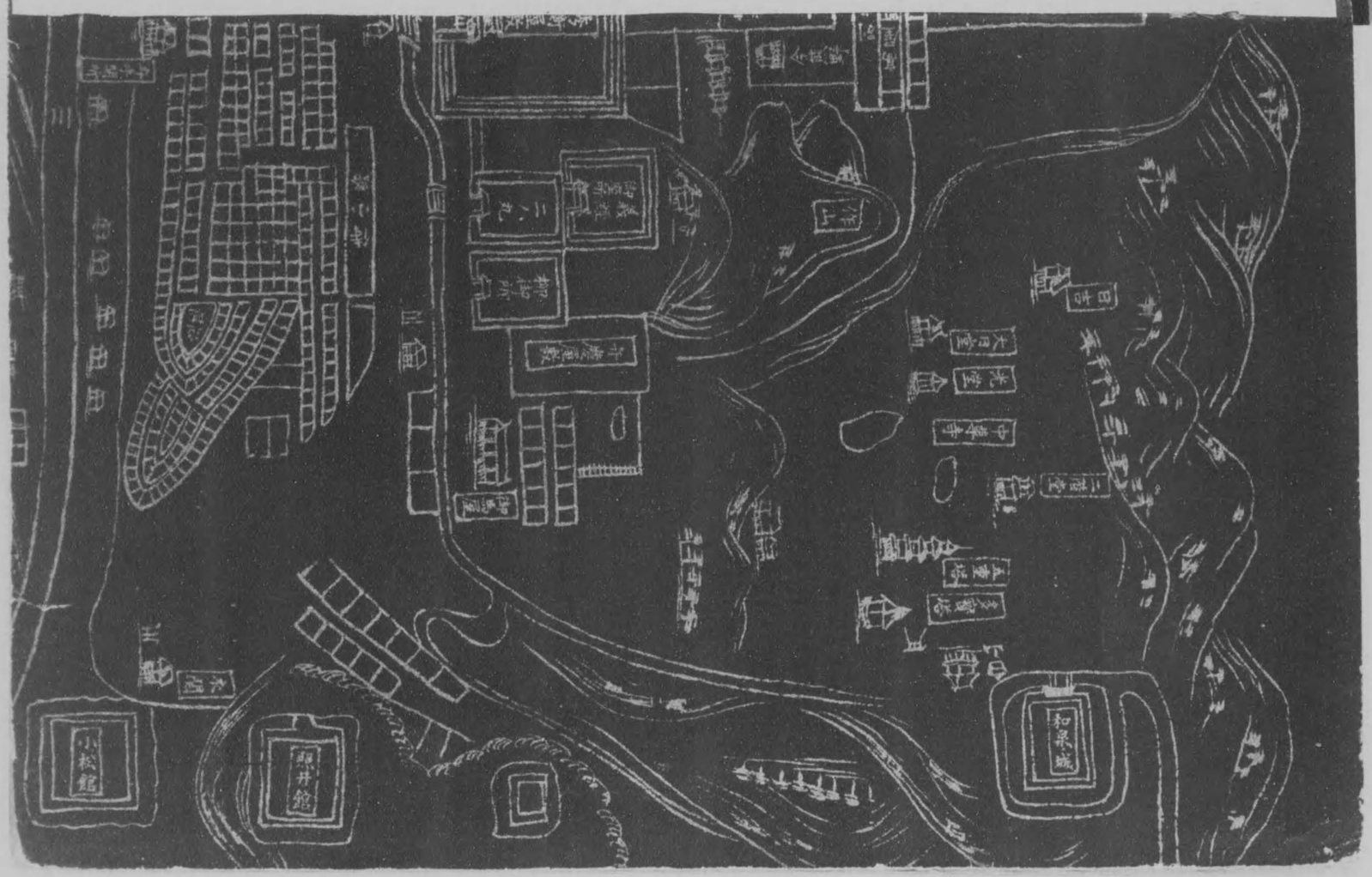
▽體裁優美にして高尚。風味かろく雅やか也。
▽平泉めぐりの後、お土産としてこの佳品をお求めあれ。

製造本舗　一關地主町
松榮堂本店　電話二二番

取次大販賣店
一關驛前　山口商店
平泉中尊寺境内　三浦商店

393
236

393
236



終